第４回 里山フェスティバル「里山シンポジウム」報告書

里山に託す私たちの未来

２００７年テーマ

「里山となりわい」

イラスト・松下優子，　テーマ題字・倉島貴浩（ワークホーム里山の仲間たち）

2007 年テーマ 「なりわい」の定義

かつての里山には、自然の恵みを楽しみ先人の知恵に学ぶ人々の暮らしがあり、その環境に負荷をかけない生活と生産の技術が豊かな里山を守ってきました．このような自然と一体となった人々の生産活動を「なりわい」と呼びたいと思います。

里山を支える「なりわい」のしくみと現状を知り、千葉県らしい里山の活用や可能性を探ります。

里山とは……

自然と調和・共存する人々の生活に育まれた森林・草地から水田や畑，川沼，水辺，そして集落を含む人と自然と文化とが一体となった空間です．この里山は，自然と人との共存の場であり，現在および未来の人々にとっては大きな価値を有します．

千葉県では，里山の保全・整備と活用を目指し 2003 年５月に「里山条例」を施行しました．その趣旨をしっかりと各地の現場に根付かせるためには，行政をはじめ農家，市民・NPO，研究者等が互いに力を合わせた息の長い取り組みが求められます．

■主　催■　里山シンポジウム実行委員会、ちば里山センター，
（社）千葉県緑化推進委員会、東金市、千葉県、城西国際大学

■後　援■　千葉日報社、朝日新聞千葉総局、読売新聞千葉支局、毎日新聞社千葉支局、産経新聞社千葉総局、東京新聞千葉支局、日本経済新聞社千葉支局、NHK 千葉放送局、千葉テレビ放送、BayFM、千葉県ケーブルテレビ協議会、（財）日本自然保護協会、千葉市、八千代市

里山シンポジウム実行委員会（2007）構成

代　表：金親 博榮　副代表：小西 由希子・栗原 裕治
事務局長：荒尾 稔　事務局会計：相馬 由起子

第１分科会　「八千代の里山を語る会」　代表：高橋 秀文（八千代市環境保全課）

第２分科会　「里山と野生動物」　代表：中野 真樹子
副代表：　石山 大

第３分科会　「里山と医療・福祉」　代表：赤城 建夫
副代表：増田 淳　　実行委員：林 みね子

第４分科会　「里山と森林・農林業」　代表：稗田 忠弘
記録係：鈴木 剛治、唐笠 敦　　実行委員：田澤 新、石田 光男、嘉瀬 智康、今関 貞夫、鈴木 雅明、山倉 周幸、稗田 政幸、小野 鈴子、福満 美代子、桐山 正治、西塚 健治、本間 一夫、野口 英一

第５分科会　「里山と観光・食」　代表：遠藤 陽子
記録：土居 元　　実行委員：遠藤 イサム

第６分科会　「里山と教育・学習」　代表：上善 峰男
実行委員：鈴木 敦、岩橋 幹夫

第７分科会　「里山と生物多様性」　代表：鈴木 優子
副代表：　松永 美知子　記録係：松永　太田　諸岡　実行委員：　相馬　永田

第８分科会　「里山と生業・起業」　代表：木下 敬三
実行委員：松山・竹内・阿知波（さんむ・アクションミュージアム）

第９分科会　「里山と人」　代表：木下 登志子

第 10 分科会　「里山と残土・産廃」　代表：井村 弘子
実行委員：金井 珠美　井上由紀子　吉川 栞

第 11 分科会　「里山と水循環」　代表：桑波田 和子
副代表：荒尾 繁志　実行委員：千葉　智雄、加藤 賢三

第 12 分科会　「里山と政策」　代表：小西由希子
副代表：金親 博榮　　記録係：田中 正彦　　実行委員：福満 美代子

第 13 分科会　「里山と竹」　代表　田代 武男

この報告書の各分科会からの報告書部分を除く全体会でのすべての報告内容及び表紙３，４に関わる全ての写真は、田中正彦氏の撮影によります

目　次

ページ

里山シンポジウム実行委員会（2007）構成　1

目　次　2

第４回里山シンポジウム参加・協力団体　3

分科会開催日程　4

全体会開催日程　5

総合司会　小西由希子　（ちば環境情報センター代表）

主催者挨拶　6

金親 博榮　（里山シンポジウム実行委員会）

堂本 暁子　（千葉県知事）

志賀直温　（東金市長）

水田宗子　（城西大学理事長、城西国際大学学長）

講演　13

「美しい森林(もり)づくり推進国民運動」の全国キャラバン

福井　照　（農林水産大臣政務官）

分科会報告　会場での報告　15

分科会報告のまとめ　司会・進行　中村俊彦（千葉県立中央博物館副館長）

基調講演　21

「 里山を活かす『なりわい』を考えよう 」

講師：　小松光一（法政大学講師：大地を守る会国際局顧問）

パネルディスカッション　26

「 里山に託す私たちの未来 ： 里山となりわい 」

パネリスト

堂本 暁子　（千葉県知事）

室住 圭一　（農業）

石井　充　（グループ「木と土の家」）

稗田 忠弘　（さんむフォレスト）

廣田　明　（林野庁森林整備部計画課）

コーディネーター

小松 光一

13 分科会報告書　38

第１分科会　「八千代の里山を語る会」　代表：高橋　秀文

第２分科会　「里山と野生動物」　代表：中野 真樹子

第３分科会　「里山と医療・福祉」　代表：増田 淳

第４分科会　「里山と森林・農林業」　代表：稗田 忠弘

第５分科会　「里山と観光・食」　代表：遠藤 陽子

第６分科会　「里山と教育・学習」　代表：上善 峰男

第７分科会　「里山と生物多様性」　代表：鈴木 優子

第８分科会　「里山と生業・起業」　代表：木下 敬三

第 10 分科会　「里山と残土・産廃」　代表：井村 弘子

第 11 分科会　「里山と水循環」　代表：桑波田 和子

第 12 分科会　「里山と政策」　代表：小西 由希子

第 13 分科会　「里山と竹」　代表：田代 武男

第９分科会は、対象テーマである「アカガエルの産卵」との時期的な事情で、現在まだ開催されておりません。

第４回 里山シンポジウム 参加・協力団体

石神谷津の四季を楽しむ会、NPO ぐるぐるバイオ、NPO 子どもの文化ネットワーク、ソレイユ、NPO 千葉県市民農園協会、岡発戸・都部谷津ミュージアムの会、小びつ川の水を守る会、上総堀り伝承の会、環境カウンセラー千葉県協議会、環境パートナーシップちば、グループ2000（環境に学ぶ）、ごみゼロネット２、桜宮自然公園をつくる会、残土・産廃問題ネットワーク・ちば、山武に雑木林をつくる会、山武町環境問題連絡協議会、さんむ・アクションミュージアム、さんむフオレスト、山武木材協同組合、下泉・森のサミット、しろい環境塾、ちばNPO 協議会、ちば環境情報センター、千葉県がんセンター、千葉県建築家協会、（社）千葉県建築士会、千葉県森林組合北総支所、千葉県精神保健福祉協議会、千葉県千葉リハビリテーションセンター、千葉県木材市場協同組合、千葉県木材振興協会、ちばのたね、千葉まちづくりサポートセンター、　ちば・谷津田フォーラム、農薬空中散布反対千葉県連絡会、PW プラス ONE、プロジェクトとけ、人と自然をつなぐ仲間、北限のトビハゼを守る会、ぼんた里山の会、都川と丹後堰公園に親しむ会、街づくり市民の会、三芳村生産グループの学校、八千代オイコス、八千代環境を考える会、八千代市ほたるの里づくり実行委員会、谷当グリーンクラブ、有害物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク、有機農業推進千葉県ネットワーク、四街道にプレーパークを作る会、ワークホーム里山の仲間たち、「わたしの田舎」谷当工房

分科会 開催日程

No	分科会名	連絡先	内容	会場	開催日・時間
1	八千代の里山を語る会	八千代市環境保全課	八千代での里山保全活動を進めるために	八千代市郷土博物館	3月31日(土) 13：00～16：30
2	里山と野生動物	[redacted] 中野真樹子	「里海とクジラ」 ～ホエールウォッチングにいこう！～	千葉県立中央博物館　講堂	4月7日(土) 13：00～17：00
3	里山と医療・福祉	[redacted] 増田淳 [redacted]	森林療法(全5回) 第1回　春の香を楽しむ	泉自然公園 (千葉市)	4月25日(水) 12：30～15：30
4	里山と森林・農林業	[redacted] 稗田忠弘	地域と共に生きる「なりわい」は成り立つか？	東金文化会館	4月28日(土) 13：30～16：30
5	里山と観光・食	[redacted] 遠藤陽子	「南房総ワクワク村プロジェクト」 “里づくりの実践”	南房総市平久里下1441「ろくすけ」	4月29日(日) 13：30～16：30
6	里山と教育・学習	[redacted] 上善峰男	農業を体験し、食を考え、子らの心を育てる	千葉県立中央博物館　講堂	5月6日(日) 13：00～16：30
7	里山と生物多様性	[redacted] 鈴木優子	生物の多様性がささえる里山の生業	千葉県立中央博物館　講堂	7月1日(日) 10：30～16：00
8	里山と生業起業	[redacted] 木下敬三	起業講座 「なりわい」につなげる	山武市松尾町 洗心館農事研修室	7月16日(月) 9：30～16：30
9	里山と人	[redacted] 木下登志子	里山と人	—	—
10	里山と残土産廃	[redacted] 井村弘子	里山を残土・産廃問題からみんなで守っていきましょう	木更津共栄残土置場及び木更津市民ネット	5月18日 13:00～18:00
11	里山と水循環	[redacted] 桑波田和子	水循環と生物多様性	千葉市緑区 越智公民館	5月18日 13:00～18:00
12	里山と政策	[redacted] 小西由希子	なりわいを支える環境支払い	千葉市生涯学習センター　小研修室1	7月8日（日） 13:00～17:00
13	里山と竹	[redacted] 田代武男	セラピーとしての竹林	四街道市・芝山町他	7月28日(土) 10:00～16：00

全体会 開催日程

２００７年 5月２０日(土) 城西国際大学 水田記念ホール

全 体 会

１２：３０　受付

１３：００　開会・主催者挨拶

総合司会　小西 由希子　(ちば環境情報センター代表)
主催者挨拶　金親 博榮　(里山シンポジウム実行委員会 代表)
堂本 暁子　(千葉県知事)
志賀 直温　(東金市長)
水田 宗子　(城西大学理事長、城西国際大学学長)

１３：２０　「美しい森林(もり)づくり推進国民運動」の全国キャラバン
福井　照　(農林水産大臣政務官)

１３：３０　分科会報告　コーディネーター　中村俊彦

１３：５５　基調講演
「 里山を活かす『なりわい』を考えよう 」
講師：　小松 光一（法政大学講師：大地を守る会国際局顧問）

１４：５０　パネルディスカッション
「 里山に託す私たちの未来 ： 里山となりわい 」

パネリスト
堂本 暁子 （千葉県 知事）
室住 圭一 （農業）
石井　充 （グループ「木と土の家」）
稗田 忠弘 （さんむフォレスト）
廣田　明 （林野庁森林整備部計画課）

コーディネーター
小松 光一

１６：２０　閉会

１７：００　懇親会　＊終了後 懇談会開催

第４回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

開会挨拶

里山シンポジウム実行委員会　代表　金親博榮

風薫る５月、太平洋からの心地よい風が吹き抜けるここ東金市、城西国際大学に、たくさんの方々にお集まりいただき本当にありがとうございます。

このシンポジウムは、第54回全国植樹祭の翌年、市民の発意により、第1回を木更津市で開催しました。その後第2回は我孫子市、昨年の第３回は八千代市でそれぞれ開催してまいりました。各々、里山に活動の場を持つ市民団体が、企画運営を行い、千葉県、地元自治体と大学関係者などのご支援をいただくという形です。

今年は、これに加え、農林水産省から、国民生活にとっても欠くことができない森林の大切さ、地球温暖化防止にかかる森林吸収源対策など、全国キャラバンの一環としてご参加いただく事となりました。

これまで毎年共通のテーマを「里山に託す私たちの未来」として、今年は「里山となりわい」というテーマで、１３の分科会が県内各地で開かれます。なりわいの衰退と、里山の荒廃、これに軌を同じくする刹那的な行動様式が、人々の自立した循環的な営みを断ち切り、孤独な個人を増やすという大きな社会的な病にも繋がっています。人を含む多くの生き物を育む里山の大切さが再認識される時代となったのです。

これまでの個々の市民の連携と協力が、実行委員会という組織活動となり、成果をあげたと言える事例を発表できるようにもなりました。

この観点から、本日は、東金市に所縁のある小松光一先生を中心として、基調講演、パネルディスカッションにより、みんなでこの問題を考えてみることとします。

堂本知事、志賀市長、水田学長、ご後援、ご協力下さった団体、個人など多くの方々のお力添えで、本日第４回のシンポジウムが開催できたことに感謝いたします。最後になりましたがご参集のみなさま方の更なるご活躍を祈念し、ちばの里山が元気を取り戻すための協力の輪が一層広がることを願って、里山シンポジウム実行委員会代表としての挨拶といたします。

ちばの里山・生物多様性となりわい

第4回里山シンポジウム開会挨拶（堂本知事）

1．はじめに

皆さん、こんにちは。里山条例ができてもう4年が経ちました。そして、今日は国の方から農林水産省の福井政務官が見えられているんで、歓迎の意味も含めて、千葉の里山をご紹介して、私の挨拶にしようと思い、工夫いたしました。

皆様もちょうどここへいらっしゃる途中、新緑が美しかったと思うんですけど、今日の題は「千葉の里山」、そして今、千葉県は生物多様性の県戦略、国では国家戦略というのもありますけれども、県戦略を今作ろうとしているところです。

生物多様性とそれから「なりわい」、今日はこの「なりわい」についてをテーマにさせていただきます。

森とか、林といいますと、とかく白神山地ですとか、それから知床の原生林を思い浮かべる、一方では今日も林野庁の方もいらしておりますが、あとは、人工林も花粉症になるほど、日本はたくさんの杉の林があります。そういった人工林もありますが、しかしその間に里山の存在というのは意外と注目をされずにきたのではないかと思うんですね。ところが千葉県はといいますと、一番高いところが408メートルの愛宕山ですから、もうすべてが里山といっても過言ではない。周り三方を海に囲まれて、そこは里海ですけれども、里海と里山の県といってもオーバーではないと思います。そういった中で今日は千葉の里山についてお話したいと思います。

2．千葉の里山となりわい

千葉の森と林、そして、その里山といわれるところには、水が湧き、そして至るところに川辺があります。その間に田畑は谷津田と千葉では呼びますが、谷津田があり、その中に集落があり、ちょうどこの絵のとおり、里山の中に田んぼがあり、そこに集落があり、暮らしがある。この里山では人々が暮らしてきた。その暮らしを私たちは「なりわい」、ひとの暮らしだけではなく、自然を全部ひっくるめて「なりわい」というふうに呼んでおります。

ところで、この房総半島の自然に目を向けたいと思います。日本列島があり、南からの黒潮、これは暖流ですが、北から来る寒流の親潮とがちょうど千葉の沖で出会います。

館山の沿岸には世界最北限の造礁サンゴがあります。九十九里の川はといえば南限のサケが遡上してくる。サンゴの間をサケが泳いでいても、実際には見たことはないが、海の中ではおかしくない。

陸でもビワなどの常緑樹と、またナシに代表されるような落葉樹の両方が生育し、南北の動植物が出会う、きわめて生物多様性豊かなところということができます。

しかも、この豊かな自然環境、そして生物多様性、これらは数万年も昔から、多くの恵みをもたらしてきました。

この日本地図のところにある大きな輪、房総半島の上にある丸、この赤い丸はなんだかわかりますか。これは日本列島の中の貝塚の分布を示したものです。千葉県の貝塚の量が一番大きな丸になっておりますが、皆さんお分かりになると思いますが、もちろん日本一であることは確かです。そして、同時に貝塚密度が高いということでは世界一です。

我々の先祖は、縄文の昔から自然の中で上手に「なりわい」を持っていたということの証拠かと存じます。さらに、この人々のなりわいは、自然と調和・共存する豊かな里山であり、実はこれは人間が作り出していったというのが、千葉の房総半島の歴史ということができます。

木材はもとより、里山は私たちに、炭とか薪などそういった燃料の供給源でした。また、山菜もあったでしょう。木の実もあったでしょう。食料の供給源でもあったのです。

また、水田はといいますと、ミニダムの役割を果たしてきました。それから、様々な生き物、今少なくなったメダカとかタニシとか、カエルが棲み、そこに渡り鳥がやってきてついばんでいく。その意味でも里山は非常に

生物多様性が豊かな場所です。

このような里山では、多様な生物の食物連鎖があり、そして自立し、循環する生態系を織り成しております。

里山とは、まさに『人の「なりわい」がつくり出した、無駄のない、しかも持続可能な生態系』でもあったのです。

「サスティナビリティ」ということを私たちは今、世界規模でいっております。「サスティナビリティ」これはまさに里山のなりわいで、昔からやってきた。日本人はそういった意味で生物多様性を上手に生活に取り入れることについては、天才だったと私は思います。よその国ではもう本当にどんどん木を切ってピラミッドを作ったともいわれているし、西の文化といわれるヨーロッパではこのような里山のなりわいはほとんどないようです。日本固有の自然、そしてその里山のなりわいから日本の伝統文化・生活文化が生まれ、私たちの精神文化の礎となっているものと思われます。

3．里山の現状と課題

○森林の荒廃

では、今どのような状況になっているでしょうか。この豊かな里山が今は危機的な状況にあります。これは何かといいますと、まず、どのようにしてこの木材の価格が推移していったかということですけど、私たちの生活が石油を使うようになりました。燃料革命によって森や林を利用しなくなりました。また、安い外材の輸入で、スギやヒノキの木材の価格も急落しました。そういったことで森が荒れ始めました。手入れが行き届かなくなった人工林は病虫害が発生してしまっています。さらに、竹がどんどん繁茂してきて木の種類が変わってしまっています。

また、これはカミツキガメですが、こういった外来動物がやってきて生態系も変わってしまい、里山は荒廃してきています。

さらに、シカやイノシシが豊かだった古くからの田畑を荒らしています。これも深刻です。田畑の周りに個々にある防護柵をこれは中に電気が通っていますけれども、これほどまでしなければ畑の被害が守れないという状況になってしまっているのです。

○廃棄物の不法投棄

また、千葉県で深刻な問題として廃棄物の不法投棄があります。様々な開発、ゴルフ場のような開発もあったんですけれども、里山が大きく変化している中で、廃棄物の問題はゴミや産廃が捨てられ、そしてその産廃から捨てられた有害なものが、地下水まで及んでしまう水質汚染の原因になっている。この荒れ方を見ていただくと最初に出たあのきれいな里山の絵となんと違ってきているか、削られ、埋められ、そしてゴミや産業廃棄物が捨てられてしまった里山は惨めです。もし、里山の木がものを言うことができれば「助けてくれー」と今悲鳴を上げているのではないかと私は思います。

4．里山条例と保全活動

そうした里山の状況に千葉の県民はたいへん心配をし、何とか守ろうということでできたのが「里山条例」です。これはどういうことかと申しますと、荒れているけれども自分のところでは手がない、また手入れができないという人たち、すなわちその土地の所有者（森の所有者）と、見るに見かねてその森をきれいにしたい、手入れがしたいという活動する人たち、市民やＮＰＯ、地元住民の方たちとの間で、県が仲介役になって行う里山協定制度がこの条例に盛り込まれております。

現在では、70 の協定が締結されておりますけれども、多くの人たちがこの森に入って、手入れをし、そして森が生き返ってきています。小さな子供たちからお年寄りまで、いろんな方が参加し、その森で楽しんでいます。さらに、いろいろな形で田畑をそして森を県民の手で何とか、また昔のような豊かさに復活させるためには、私たちは手をかけ、真剣に考えていかなければならないと思っております。

５．里山と生物多様性と地球温暖化

もうひとつ、お伝えしたいことがあります。

今、地球の温暖化が急速に進んでいます。世界各地で異常気象が多発して、被害が出ています。今に私たち人間の健康あるいは農林漁業の面でも大きな影響が出るのではないかと懸念されます。

６．Ｇ２０の千葉開催

そうした中で、安倍総理は今度日本で開かれますＧ８サミットが、北海道の洞爺湖町で開かれますが、この主なテーマを「環境」というふうにおっしゃっておられます。

たいへんうれしいことに、このサミットに先立ちまして、来年３月に、気候変動とクリーンエネルギーなどについて話し合う国際会議なんですが、Ｇ２０グレンイーグルズ閣僚級対話が千葉県で開催されると先日政府から発表がありました。

この会議は、アメリカ、ロシア、日本をはじめとするＧ８国に、新興経済諸国の１２カ国、中国とかインドなどが加わった 20 か国。今、ＣＯ２の排出国トップがアメリカ、二番目が中国です。三番目がロシアです。そして、4 番目が日本ということになりますが、そういった中でこういう会議が千葉で開かれるというのは私たちとしては是非とも歓迎したいと思います。

千葉でこれから温暖化と里山、また温暖化と生物多様性といったような関連も大いに私たちの運動として展開し、世界からいらっしゃる閣僚の皆様をお迎えし、同時に議論し盛り上げていって、Ｇ８までずっと関心を持ち続けることが大事だろうと思っております。

７．まとめ

最後にまとめさせていただきますが、里山は人と自然が調和した「なりわい」の場であり、この豊かで持続的なシステムを私たちはもう一度見直し、学び活用していかなければならないと考えております。

今日のテーマ「なりわい」を私たちは本当に皆でかみ締めながら、また、昔の人に学び、そして、21 世紀型の新しい森づくりに向かっていきたいと思っております。

ありがとうございました。

第４回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

主催者（東金市）代表挨拶

東金市市長　志賀直温

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介頂戴いたしました、地元東金市市長の志賀と申します。今年は第４回の里山シンポジウムに大勢の方々にご参加頂きまして、地元市長として、この地にいらして下さったことを心より歓迎を申し上げる次第でございます。また今回は東金市もこの会の一員として参画をさせていただいておりますが、この里山シンポジウムは、平成15年5月に千葉県で里山条例をその趣旨を各地域に根付かせることを目的に開催されてきているということでございます。今回私どももこの城西国際大学をお借りして、今回開催できるということを心から皆様にも御礼を申し上げ、ありがたいことだと思っております。

東金市の紹介を少しさせて頂きます。地形的には山間部と九十九里平野この両方がある地域です。市全体が里山という認識をしています。何故かというと、山間部における目に見える形での、里、山、だけではなく、それによって供給される水、燃料、私どもも30年代は山からかやを拾ってきてそれを燃料にしたという経過があるのです。そういった中で昨今では自然環境の破壊というのがかなり深刻化してきている中で、今回のサブテーマである「なりわい」はとても大切なキーワードであると認識しております。それは、地域における産業振興、地域産業を活性化させることによってそれが「なりわい」となり、その結果自然環境の保全につながっていくということも考えられると思っております。東金市でも現在の基本計画の中では、産業振興を重点政策の１つとして取り上げております。その一環として、いかにこの地域産業を確立できるかという問題に通ずる中で、本日シンポジウムの講師もされております小松先生にも市としてお骨折りをいただきまして、地域の財産である水田や畑を都市との交流の中で使うことはできないかということで、数年前から田んぼの学校という取り組みをしています。これは谷津田、ここはお米がおいしい田んぼなのですが、ここに都会から大勢の方々に来て頂いて、田植えから始まって管理収穫までをするという流れを地域でやっていっていただくことをしています。また、市民農園の畑でいろんな作物を自ら作っていただく取り組みをしております。これは都市と農村との交流を目指しておりますけれども、これを発展させた形での「なりわい」というような可能性にも大変期待していきたいと思っております。本市の位置する地域というのは、ご承知のように山武杉という木材が有名な木材としてございます。最近では先ほど知事さんからもお話がありましたように、荒れた山林、森林というのが見られるようになってきたのも現状で、大変残念に思っております。この件についても自然と一体となった人々の生産活動であるなりわいが成り立ってくることによって、結果的にかつてのように管理された山林の姿が戻ってくるということも期待したいなと思っております。伺いますと昨今、輸入材ではなくて国産材が見直され、値段的にも見直されてきている部分があるということですので、それも期待したいなと思っております。また、本日のパネリストでもあります、石井さん、稗田さん、地域の方々による、地産地消の取り組みも進められてきておりまして、今後の展開にも期待したいなと思っております。本日はまた、全国展開をされております、「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」の一環であります全国キャラバンということで、農林水産大臣の福井政務官にもお越しいただいるということですので、会場にお集まりの皆様と一緒に考えるいい機会になるのだろうと思います。講師であります小松先生は、各方面に明るい方でありますし、このあとのパネルディスカッションは堂本知事さんもパネリストとしてご参加されるということで、有意義なパネルディスカッションになるのではないかと期待しております。

結びにあたりまして、本シンポジウムの開催にあたりまして、こういった素晴らしい水田記念ホールという施設の提供をいただきました、水田理事長先生を初めとして関係者の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、このシンポジウムの成功を心からご祈念申し上げまして、開催地の市長としてのご挨拶とさせていただきたいと思います。

本日は誠におめでとうございます。

第4回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

主催者代表挨拶

城西大学理事長、城西国際大学学長　水田宗子

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました、水田宗子でございます。城西国際大学の学長、そして学校法人城西大学の理事長を致しております。本日は第4回里山シンポジウムの開催、大変おめでとうございます。また城西国際大学を開催の地としてお使いいただくということで、私どもは大変うれしく、名誉なことだと思っております。本日はよい議論がたくさんできて、将来に向けてのよい一歩を踏み出すことができますよう、心から祈念しております。

私どもの大学は1992年に東金市から誘致を頂きまして、大学を開設いたしました。学校法人城西大学は埼玉県にキャンパスをもつ大学で、既にそこで40年ほど教育をしていましたけれども、千葉県の東金市から大学をつくるようにと誘致を頂きまして、ありがたくここに大学を設置させて頂いたわけでございます。

その誘致の理由のひとつには、この山武、九十九里、外房、南総にかけては大学がない、言葉は悪いのですが、教育の進学率が全国平均を下回っているところでして、そういう意味でも文科省もここに大学をつくることを大変推薦し、支援をしてくれたのだと思います。また、創立者の水田三喜男は千葉県鴨川市曾呂村の出身でございます。埼玉県に大学をつくっておりましたけれども、いずれ千葉県に次世代を育成する場をつくりたいというのが望みであったと私どもは考えております。

その開設の準備をするためにこの東金の地に足を運ぶようになりまして、私は、この千葉県の山武地域、そして九十九里から外房線の地域、そして鴨川へ参りますために内房線を通って参りました時に、千葉県がいかに素晴らしい、日本の古い農耕文化のあり方、生活様式を残しているところであるかということに心から感激をいたしました。私は、外国で教鞭をとることが非常に長かったもので、外から日本を見た場合、日本に帰ってきた場合、日本の本当のよさというのが何であるかということを日々考える年月が随分ありましたが、千葉県に参りましてやはりここは私の故郷なのだという気持ちをとても強くしましたのは、個人的なここと同時に、日本文化が生活を通して守ってきたと同時に、その生活様式というのが自然の中に包まれて残っているというのをつくづく感じまして、そして今堂本知事からもお話がありましたように、里山や里海が荒れ、開発の中で変わっていくことをこの目で実際に見ていますと、国や自治体の政策が大切であり、また市民のみなさんの努力も非常に大切なのですけれども、やはりこれを引き継いで未来につなげていく次世代の育成ということがどれだけ大切であるかということを私どもは強く感じております。

それに賛同してくださった教職員のみなさんがここで人材育成ということを始めたわけでございます。私どもも、後継者塾やプロジェクト教育というのを立ち上げて、棚田の整備のお手伝いや、棚田の四季をめぐる生活の様子をアーカイブスとして撮っておこうと、メディア学部の学生たちが田植えをしたり稲刈りをしたりするだけではなく、それを残していくことをしたり、林道や桜並木の修復をしながら学生たちが里山に入っていって実際に労働をすることによって、そこをメンテナンスすることの大変さと大切さとその結果の素晴らしさを身をもって体験してもらうことによって、次世代の人たちが日本の素晴らしい生活様式であり文化である里山、里海をしっかりと守って、またその次の世代につなげていくようになってくれることを考えております。

私どもはまた、鴨川市から誘致を受けまして観光学部を設立いたしました。観光というのは国の大きな経済資源であります。先ほど堂本知事がおっしゃいましたように、人を驚かすような景観というのが、または非常に大きなエンターテイメントの施設というのだけが観光のポイントというのではないので、これからは21世紀には大きく観光が変わり、自然の中でもう一度心身を癒し再生していく方向に向かうのではないかと思っております。

そういう意味でも、この千葉県がもっている非常に豊かな里山や里海、そして千葉県に住んでいる皆さんがしっかりと行政と手を結び、市民の方たちと一緒になって守っていくということが、これからの日本の繁栄のためにも大切なことではないかと思っております。そういう意味でも私たちは教育の場でそういうことがしっかりとわかり、そういう思想を身体の中にもって生活していくという次世代の人たちが一人でも多く

輩出できるようにしていきたいと思っております。

城西大学40周年を記念しまして、鴨川にあります創立者の民家を再生いたしました。そしてそれは重要文化財登録になったのですが、ここでも千葉県にはいかに民家が少なくなってしまっているかということを痛感しまして、この民家のもっている合理性や環境管理にもいかに考えられて造られているかということも痛感しましたけれども、そういうプロジェクトにも学生たちに参加していってもらいまして、そこから学んでいってもらう。そういう実体験を教育の場で進めていきたいと思っております。

これからも、城西国際大学を地域の皆様、それから千葉県を始めとして日本の政策立案される皆様と手を携えまして、環境を良くし、保全していくことに力を尽くしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくご支援を賜りたいと思っております。

本日は農林水産省の福井先生、堂本知事様、志賀市長様、ご出席の市民の皆様でおつくりになっている里山シンポジウムでありますから、大変意義の深い議論も出て、様々な報告もあることと思います。

どうか、今日の成果をこれからのご活動につなげていっていただきますようご成功をお祈りいたしまして、私の挨拶とさせて頂きます。どうぞよろしくお願い致します。

第4回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」の全国キャラバン

福井　照　氏（農林水産大臣政務官）

ご　挨　拶

皆さんこんにちは。

ただいま、ご紹介いただきました農林水産大臣政務官の福井でございます。元は政務次官と言ってましたけれど、今は、副大臣と政務官に分かれております。農林水産大臣は皆様ご存知のように松岡大臣でございます。

実は先週から「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」全国キャラバンというキャンペーンを農林水産省で始めておりまして、その第2週目ということでこの里山シンポジウムにお邪魔させていただきました。

安倍総理の「美しい国づくり」は、何よりも「美しい森林（もり）づくり」からということで、農林水産省一生懸命考えまして、昨年も補正を含め、暮れに数百億円の予算の分捕り合戦をしましたが、そのほとんどを農林水産省がいただき、765億円というお金を間伐に使うということになりました。まさに、ターニングポイント、ポリシーが変わってきました。農林水産省も間伐こそ日本で農林水産行政として本当に根幹としてやるべきことだという風に思い定めたということでございます。これは地球環境問題で3.8パーセントのCO2を吸収しなければならないということだけではなくて、この日本民族の暮らし方、生き様、これからの日本の行く末を左右するからだということでございます。

それで、今日この「里山シンポジウム」にどうしても来たかったのでございます。というのは、今日はだいぶ知的レベルが高そうな人たちが多いので、ちょっと知的レベルを高めてお話をさせていただきます。

実は世界を覆う政治思想が今、まさに転回点を迎えております。アングロサクソンのネオリベラリズムといいまして、もともと世界は自由と平等をわざわざ対立軸にして、振り子時計の振り子のように自由100パーセントのときと、平等100パーセントのときと、自由と平等を引力と斥力にして、まるでモーターのように時代を進めていくことを繰り返してきたわけであります。

この20年ぐらいはサッチャー、レーガンから始まって、ネオリベラリズム。もう、まさに自由100パーセント、小さな政府が善である。規制緩和が善である。そして、その市場原理路線ということで、竹中、小泉路線でこの7～8年余りやってきましたから、もうそろそろ平等に振り子を戻さなければいけない。その平等の行き先はまさにこの日本人の農耕民族としての村落共同体、この「里山となりわい」も、まさに今日ご議論していただくそのものズバリなんでございます。これはもう日本人しかできません。日本人だけができうる。この暮らし方、哲学、思想なのでございます。

それが証拠に、柳田国男という民俗学者がおりまして、農林省の役人でありましたが、インハウス・エンジニアで、民俗学者としてしか、有名でないのですけれども、まさに、政治思想、日本の思想家の金字塔でございました。それが農林省の元役人であったわけであります。たとえばその人が、昭和21年に予言したことは、農地解放で庄屋がいなくなると徳目をずっと伝える人がいなくなるから、日本人の心の様があるいは社会全体が解けてなくなってしまうということを、実は予言していたのです。予言してまさに今ズバリで、子殺し、親殺し、いじめ、この社会問題に目を、耳を覆いたくなるような問題が起きているわけで、親学とか、この教育再生と言われているのはまさに、この徳目をお爺さんからその親へ、その親が子供へと伝える人、その地域地域で伝える人がいなくなったから、その装置としてのまさにノブリス・オブリージュが居なくなったからということを昭和21年に予言した人が農林省の役人であったのです。

また、二宮尊徳も思想家でございました。二宮尊徳の教えを教えている大日本報徳社という、学校の門柱には

二つあって、右の門は「道徳門」といい、左の門は「経済門」と書いてある。「道徳なき経済は犯罪である。」とは誰でもいえますが、「経済なき道徳は寝言である。」。つまり、儲けなければならない。しかし、道徳も50パーセント、経済も50パーセントというまさに実践農耕民族としての村落共同体の生き様、生き方を二宮尊徳がずっと教えてきた。これを日本民族の農耕民族としての村落共同体の生き方ではなかろうか。ということで、今日「里山となりわい」でもちろんその経済をすべて忘れたなりわいではなく、経済も考えていた。食品リサイクルすべてでございます。

先ほども間伐や照葉樹林を植えているNPOを激励させていただいたわけでありますけれども、やっぱり最終的にはビジネスとしてのチェーンがなければならない。まさにそういうことでございます。世界中でアングロサクソンが設計をしましたので、日本人しか世界に文化として発信できないということであります。日本人が世界にやるべきことは、経済的貢献でもひとつ、それはX軸、しかしY軸として農耕民族として村落共同体みんなで一緒に平等に幸せになろうという生き様を実践して、世界にお示しをするということこそ日本人がこれから国際社会としてやるべき仕事ではないかと思います。

一つ、例を示して話を終わらしていただきたいのですが、ちょうど手話で「幸せ」ということを、日本語では顎をこうやって撫でて「幸せ」と耳が聞こえない同士の方々でコミュニケーションを表現します。この顎を撫でるということは日本人だけであり、普通のアングロサクソンのアメリカ人又はヨーロッパではハートを片手あるいは両手で押さえて、「アー幸せ」ということを手話で表現します。日本人は、顎を撫でる。これには語源がありまして、語源は東アジア、特に中国の古老が長いあごひげをこうやって撫でているというこの動作が語源なんです。手話で語源ということもおかしいですけれども長いあごひげをゆっくり撫でている動作が語源であります。

つまりどういうことかというと、村長が目の前に展開してくる村人が時には喧嘩しながらでも同じように平等そして助け合い、慈しみあって幸せになっているということを見て、初めて村長さんも幸せだなと、ヨッシャ、ヨッシャと思うという、この崇高なる日本人の心の性を手話がまた示しているわけです。これこそ、日本人だということを是非自慢にして誇りにして、今日シンポジウムでご議論していただければ、この「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」全国キャラバンの第２週目ということで、皆さん方にこの運動に参加していただくことで、誠に私自身も誇りに思います。

是非よろしくお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。
本当にご苦労様、ありがとうございました。

第４回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

分科会（13 分科会）報告

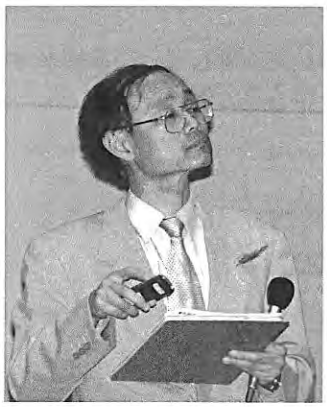
司会・進行　中村俊彦　（千葉県立中央博物館副館長）

総合司会　小西

「八千代の里山」と題して高橋秀文さん、「里山と野生動物」石山　大さん、「里山と医療福祉」赤城建夫さん、「里山と森林農林業」稗田忠弘さん、「里山と健康・食」遠藤イサムさん、「里山と教育・学習」上善峰男さん、「里山と生物多様性」鈴木優子さん、「里山となりわい・起業」木下敬三さん、「里山と人」木下登志子さん、「里山と残土・産廃」井村弘子さん、「里山と水循環」桑波田和子さん、「里山と政策」金親博榮さん、「里山と竹」田代武男さんです。これより、千葉県立中央博物館副館長の中村俊彦さんよりご紹介いただきます。

司会　中村

毎年恒例になりました分科会報告です。分科会の討議結果やこれから開催する分科会の予定、短くてすみませんが、今年は各 2 分間でお話いただきたいと思います。なお、分科会報告の後に、今回の全体テーマの「なりわい」って何、ということも是非、ひとこと言っていただくようにしたいと思います。それでは、まずは報告、第一分科会「八千代の里山を語る会」からお願い致します。



高橋　第一分科会、八千代市環境保全課の高橋です。テーマは「八千代で里山保全活動を進めるために」ということで進めました。目的は 4 つです。1 つは里山の現状と生かし方について学ぶ、2 つ目に先進的な行政の取り組みについて学ぶ、3 つ目に市内で開発の予定がされて

いる、区画整理事業の現状について把握する、そして4つ目に里山に関わる活動をすすめている市民団体の活動の状況の報告と、情報交換、連携を強める、このような目的で行いました。具体的には、『里山の現状と生かし方』ということで、里山センター会長の金親博榮さんに講演していただきました。また、千葉市における谷津里山保全の取り組みということで、千葉市環境保全推進課の斉藤久芳氏から講演をいただきました。また、八千代市の現状ということで西八千代北部特定土地区画整理事業の現状について、市の土地区画整備課長から報告を受けました。また、市民団体の活動報告も、当日 10 団体が参加していたのですが、うち7団体より報告を受けました。

結果としましては、参加者が里山の大切さや、実際に抱えている問題点を学ぶことができました。また、具体的に保全の取り組みを進めている行政の事例や、県の里山条例に基づく市民団体の事例や、企業の活動事例等を学ぶことができました。さらに環境問題に取り組む市民団体の情報交換、連携を強めることができました。今後八千代市内で里山活動を進める上で、非常に有意義なものになりました。

まとめとしまして、市民、土地所有者、企業、行政が協力し合い、八千代の里山を守り再生しようということで報告を終わりにします。

石山　第2分科会**野生動物分科会の**石山と申します。

代表の中野に代わりましてご報告させていただきます。僕たちは4月7日に「里海とクジラ～ホエールウォッチングにいこう！～」と題して講演会を開きました。内容は、銚子海洋研究所の宮内幸雄氏をお招きして、銚子沖の鯨類について、ＩＦＡＷ〔国際動物福祉基金〕ジャパン事務局長の舟橋直子氏をお招きして「ホエールウォッチングの歴史と現状について」語っていただきました。後半は、城ヶ崎イルカ・クジラ・ネイチャーウオッチングセンターの石井泉氏に「漁師にとってのホエールウォッチング」について、最後にさらに国際海洋自然観察員協会の菅原茂氏、いすみでホエールウォッチングをされている中村松洋氏を迎えてパネルディスカッションを行いました。

僕たちの野生動物分科会というのは、これまで里山に住む野生動物にスポットライトをあてていたのですが、今年は里海、クジラやイルカにスポットライトをあてて講演会を開きました。最初に、里海とは何だろうと思われる方が多くおられると思うのですが、里山に対比して、山があるなら里海もあるだろうと 1990 年代の後半から使われ始めた言葉です。里海とクジラの関係を考える時に、その里海のなりわいは何だろうと考えたときに、捕鯨を思いつかれる方は多いと思います。しかし、この捕鯨は今多くの問題を抱えています。クジラは余すところがないと言われている優れた動物ですが、それゆえに乱獲され激減したため、捕鯨については反対の風潮になっています。それに代わって、ホエールウォッチングが現在注目されています。このホエールウォッチングですが、教育的効果や心の豊かさだけで、何も得るものはないのではないかという意見もあると思います。しかし、今回の講演会を通じて、クジラという観光資源が地元に富をもたらすということがわかりました。

まとめとしましては、ホエールウォッチングというのは、新たななりわいになりえるのではないかと提案します。また千葉は里山だけでなく美しい里海にも囲まれています。ぜひ皆さん、足を運んでみてください。以上です。

赤城　医療と福祉からは、森林療法を実施した、という報告です。昨年は4回、今年は7回の予定です。1回目は4月25日千葉市泉自然公園で行いました。これからの予定を紹介します。2回目は6月3日佐倉市市民の森で個人療法を行います。一人一人の方のカウンセリング、療法を行う予定です。3 回目の8月 25 日は「夏の風を楽しむ」というテーマで考えています。4回目の9月 23 日は「稲刈りの後の香りを楽しもう」というテーマです。5回目は11月 23、24 日の1泊2日で2 度目の個人療法を予定しています。6 回目の 12 月 15 日は秋が終わり、寒くなったところで火を楽しもう、と考えています。最後の2月 23 日は寒さの中で、火の暖かさを味わおうと思っています。

4月 25 日に実施した第1回目の結果ですが、小雨の中で実施しました。参加者の方が書いてくれた感想を紹介します。どこからか遠くから太鼓の音が聴こえた、豊かなゆっくりとした時間がもてた等の感想をいただきました。ここから考えますと、森というのは、人の社会から遠のけてくれるところにいいところがあ

るのではないかと思っています。里というのは、人とつながっていく楽しさが味わえるのだと思っています。7回ありますので、皆さんどうぞご参加ください。

稗田　第4分科会の森林・農林業分科会です。私どもは毎回東金市さんと共同で分科会を開いております。今年のテーマは「地域と共に生きる『なりわい』は成り立つか」です。市民の方と専門家を交えて討論会をやろうと企画しました。内容は、かつてこの地域にもあったような、環境に負荷をかけない暮らし方や仕事の仕方は、現代ではどういう形で成立するのだろうかということをテーマにしました。リポーターとして、

山武杉で地産池消の家づくりをする、さんむフォレストからのリポートと、今日のパネラーにもなっております、グループ「木と土の家」、という材木屋と工務店が一緒になって山武杉で家づくりをしようというグループと、東金市の農政課の方と、鈴木さまという農民の方より営農組織をつくって、美しいふるさとづくりをしようという活動のご報告を頂きました。

結果としては、4月28日を開催日に選んだら、一番の農繁期で、農家の方、農家を兼ねた林業家の方が来られないということで、参加者は非常に小人数になりました。行政の方、民間の木材会社の方、農家の方が膝を交えた話し合いができたということで、内容としては充実した討論ができたのではないかと思います。農業の方から、地域で活動する人それぞれが役割を見つけて、人の心をどう酌んでいくかが大事なのではないか、とお話を頂きました。林業からは、自分たちの暮らす地元の特産材である山武杉で住まいをつくることによって、地域循環に貢献する仕事をする、自分たちは建築を通じてなりわいをする、というお話を頂きました。行政からは、消費者が地産地消に目を向けて地域循環へ参加して欲しいというお話をいただきました。なりわいが成り立つための方法としましては、消費者の消費行動をなりわいを支える側に向けていただきたいということです。こういうなかで、市民と行政が信頼関係の中で情報を出し合うことが大事だということ、市民に地元を知ってもらうきっかけを作って、消費行動を変えてもらうことが大事だという結果になりました。ありがとうございました。

遠藤　第5分科会「観光と食」の遠藤と申します。千葉県南房総市平久里というところなのですが、みなさんテレビでお馴染みの「ダッシュ村」ってご存知ですか？あれをそのままつくるのではないのですが、ダッシュ村ようなところができるといいなあということで、勝手に取り組んでいます。なりわいから思い浮かぶことを、みなさんからいくつか出してもらいました。出してもらったものを、この場所でどれだけ取り込めるかということを考えました。今日、受付のところにこの

場所の下手な絵を描いてあります。そのところにポストイットも置いてあります。みなさんそこで何かを感じましたらポストイットで貼っておいていただけるととても助かります。そんなところで、なりわいということで思いつくことをいくつか話し合いました。場所は、スライドにもあるように、茅葺き屋根の民家があって、その前に畑があって、棚田があって、すごくいい場所なのです。一度見ていただけたらと思います。

私はせっかちなので、すぐ結果を言います。結果としては、この場所で一番大切にしたいことがあります。それは、子どもや大人や老人たち、人間だけではなくほかの生き物たちもがこの場所に来たら何かを感じ取れる場所にしたいということです。では、ポストイットをよろしくお願いします。

上善　第6分科会「里山と教育・学習」を担当しております、森林文化教育研究会事務局長の上善と申します。私どもの活動は2分では到底話しきれませんので、映像を見ていただいて、若干補足したいと思います。

今年は子どもたちが主役でした。千葉市立みつわ台北小学校6年生の諸君です。彼らは5年生の時から調べていることをまとめて、先日中央博物館で報告をしました。美しい国づくりと言われていますが、美しい国をつくるには美しい心を持った人を一人でも多くつくること、それが小学校の役割ではないでしょうか。そこで、農業を体験し、自分たちが見えなかったものを見える心をつくるということで行いました。その結果、彼らはこの地に残る農業の信仰というところまで踏み込んで調べ、その後は学校全体が活性化した感じでした。以上です。

鈴木　第７分科会は「生物の多様性が支える里山のなりわい」をテーマにいたします。７月１日に中央博物館で行います。里山シンポジウムと生物多様性県民会議両方の主催で開催致します。内容は、里山の生物の多様性が支える生産活動・なりわいの現状を知り、これを近未来に引き継ぐ戦略を話し合い、提案します。また、里山の自然と一体となったなりわいの素晴らしさやおもしろさ、生活の工夫と共に大変さも認識しあい、里山でのなりわいを再興するためにはどのような県民の協力と努力が必要かを話し合います。お楽しみとしましては、里山の生物の多様性の恵みとして千葉県では菜の花のはちみつが採れます。その農家→養蜂家の方をお呼びしております。菜の花、レンゲ、ソバ、クローバー、アカシアなどの蜜源の違うはちみつの試食をしていただきたいと思っております、またハチが交配した里山の果実酒も展示でご用意したいと思っています。ぜひみなさま、いらしてください。

木下　第８分科会　里山となりわい起業の起業講座を担当します木下です。里山活動に関わらず、福祉、子育て、ボランティア活動を行っていらっしゃるとは思いますが、これは決して勤労奉仕ではありません。人のため世のために人に喜ばれる活動をしながらお金を無視してでも考えていきましょうということではんがつづきしません。

また助成金や補助金たよりではなく自立してやっていきたいと思っています。その中で、活動費はもちろん新しい形態の有限責任組合や有限会社など様々な形で、業を起こして生活費までという、なりわいにつなげる講座を企画しました。講師には、女性のための世界銀行日本支部 WWB ジャパン代表の奥谷京子さんという専門家の方をお招きして、７月 16 日海の日に山武市の旧松尾町役場の前にある農業改良普及センターで行います。参加費は 1000 円かかりますが、農業だけではなく福祉などのボランティアをされている皆さん、ぜひお集まり下さい。よろしくお願いします。

木下(登)　第９分科会「谷津守人」我孫子市から来ました木下と申します。我孫子市にあります、岡掘戸一部谷津の 36.7ｈａの土地を野外ミュージアム、谷津ミュージアム構想というものをもっておりまして、ここを市と市民の共同で復田作業と生物の多様性を促進するようなことをおこなっています。昨年は市民が維持管理をしたことで、水辺が増え、赤カエルが急増したということを分科会でご報告しました。その後も精力的に活動しており、田んぼも昨年より２倍以上に増えております。

今年は徐々に農業者の支援も頂きまして、農業者からの視点による意見ももらえるような分科会を開催したいと思っております。まだ、開催日、場所は我孫子市内、ときちんとは決まっておりませんが、ホームページの中で決まり次第ご案内したいと思います。徐々に人とのつながりが広がって、さらに放置水田の復田に繋がっていけばいいなと思っております。開催の際にはぜひ足を運んでくださいますよう、よろしくお願い致します。

井村　第 10 分科会　里山と政策　残土産廃問題ネットワークちばの井村と申します。里山が残土産廃に荒らされているということは皆さんご存知だと思います。もうこの 10 年前には里山をもっていってしまい、その後にもってきたのが残土産廃だったのです。今、また里山の森を切り払ってその何万年も前から堆積している石や土を首都圏の建造物にもっていってしまう、ということが行われています。大網白里町の萱野の田園地域に産廃廃棄物場ができる、何とかして欲しいということで、4 月にはこの萱野に、5 月には八千代の吉橋というところにまいりました。吉橋は産廃を埋めた上に団地ができるという問題です。6 月、7 月、8 月とあちらこちらで問題が起こりますので、とにかく見に来て欲しいと地元の方から言われています。里山がなくなるのではなくて、里山の中にある森が又山がなくなってしまう、これは本当に問題だと思います。私たちは今ある森や山をどうやって守っていこうかということで一生懸命やっております。何万年も千葉県を支えている地層に手をいれて他県の建設事業に持っていってしまうなど、千葉県民として許せることでしょうか。とんでもないことと思います。

桑波田　第１１分科会　「里山と水循環」の桑波田と申します。私たちは里山と水循環について地下水の仕組みや谷津田の効用などを学んできました。今年は現場を見学し学びの場としていきたいと考えております。「水循環と生物多様性」、湧水と生き物の場を見て考えていきましょうということで 6 月 30 日 10 時～16 時に開催を予定しております。場所は、千葉市緑区大藪池という大地から水が染み出してくる感動的な湧水です。そこで現場を見て、講演に入りたいと思っております。内容は、午前中に大藪池の見学、谷津田で耕作している方々の紹介と生き物観察をします。午後には、越知公民館に移動して千葉大園芸学部の唐先生が長年研究されています、地下水と涵養域、水質のことについて講演していただきます。大藪谷津で活動している市民団体からは、生き物と保全についての報告を聞きます。そして、水循環と生物多様性についての話し合いを全員でしたいと思っております。先着 30 名さまです。東金市からも近いのでぜひみなさんご参加下さい。よろしくお願いします。

金親　第 12 分科会　里山と政策　ということで環境支払いを勉強してみたいと思います。ご存知の通り、農家が、林業家が田んぼや畑、山をきれいにしていくということは、これまでは、最終的には生産物の売り上げが目的だったのですが、これがまさに国を守る、文化を守る、個々の生活を守ることであったということが今再認識されています。これに対して商品の価格を下支えするという形では既に国際的にはもう通用しません。そんな段階のなかで、環境に配慮した食物、環境に配慮した活動が農家、林家に求められています。そういった活動に対して国家的な助成を行おうではないかということがこの 19 年から始まります。そういったものを、ヨーロッパやアメリカの例を勉強して、千葉県にもこういう例を広めてほしい、その勉強会を開きます。7 月 8 日、千葉市生涯学習センターで 13 時から行います。よろしくお願い致します。

田代　第 13 分科会　「里山と竹」、NPO 法人竹研究会代表の田代です。この分科会では、里山の活用と森林セラピーということで、7 月 28 日土曜日 10 時～16 時まで四街道市の中台にて行います。かつて竹は日本人のなりわいに深く関わってまいりました。しかし、竹をとりまく環境は劇的に変化し、今や竹はやっかいもの扱いにされております。NPO 法人竹研究会は時代にあった竹林の活用を考えてきま

したが、そのひとつが里山の活用としての竹林セラピーです。日本人が育てた美しい竹、めずらしい竹はたくさんありますが、十分に活用されておりません。そこで、里山の竹林を整備し、名竹を里山に移竹することなどを実施してまいりました。竹の美しさを再認識すると共に竹林を健康増進や健康回復に役立てないかと考えております。今回は、白い竹、アルビノの竹を植えてある千坪くらいの竹園を見ていただきたいと思います。また、希望者の方にはオウゴンモウソウチク、これはモウソウチクの幹が突然変異をしたものですが、この見学も午後から予定しております。まず、美しい竹を見ていただき、竹の良さを認識していただくことと、それを通じて里山の活用を考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

中村　それでは、一人ずつ、里山のなりわいって何？その大切さも含めて一言ずつお願いします。

高橋　自然という資源に働きかけることによって、人々がいつまでも暮らしていけるような生産活動ではないかと思います。

石山　里山・里海になりわいというのは、人と共に野生動物も生かすことだと思います。これを機に野生動物の視点からも考えていただけたらと思います。

赤城　人と森の中間、人が森の中に入り、人が人から離れられるということが里山の背景にもっている力だと思います。

稗田　里山となりわいは、自分の利益ばかりではなくて、他の人もいいようにという先人の働き方に学ぶことだなと思っております。

遠藤　なりわいってあまりよく分かりません。ただ、食べるために働く、生活をするために働く、贅沢をするために働く色んなことがあります、それがなりわいかなと思いますが、基本は生きるために働く、動物なんか食べるためになんかしますが、これが基本で次に生活するために働く、それから先はわかりません。

上善　里山となりわい、これは里山に人が住めるということです。里山に人が住めなくなれば荒廃します。

鈴木　自然の一部として生きて生かされる仕事で、全人格を賭けた仕事だと思います。

木下　新しいなりわいとして、ボランティア活動の自立

木下(登)　ひとつの営みが、他の営みへと連鎖していく、支えあう、そういうようなことかなと思います。

井村　里山を大事に残していく、そのためには住民がみんなで一緒になって里山を守っていこうとする、その力が欲しいと思います。

桑波田　今世の中は空前の水ブームです。里山を保全して、千葉の水ブランドを目指したいと思っております。

金親　なりわいとは、家族愛であり、隣人愛であり、郷土愛、これが基本になければできないものだと思います。

田代　竹は昔から日本人にとってはなりわいそのものであったと思います。しかし竹を取り巻く環境は大きく変わりましたので、時代にあったなりわいを考えなければなりません。そのひとつが森林セラピーと思っております。

中村　私も、自然・生態の研究者として一言申し上げたいと思います。自然や生物、また生命の軸の中で，人間もそのリズムに合わせて生きていくことが「なりわい」と思います。ぜひ、経済的価値観で社会を判断するのではなく、いま県で戦略づくりも始まりましたが「生物多様性」また「生物・生命・いのち」，そういうものが中心となった社会，まさにみんなで助け合う社会をつくっていかなければならないと思います。

最後に，今回の会場の「東金市」ですが，東金という名称は、鴇嶺，鴇ケ根から由来していると言われています．千葉の里山，今年は旭市にコウノトリが飛来しました．朱鷺もまた東金の空に舞う日が来るように、そんな夢を追い続けて、里山を大切にしていければと思います。これで分科会報告を終わりにします．どうもみなさんありがとうございました。

第４回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

基調講演　　里山を活かす「なりわい」を考えよう

法政大学キャリアデザイン学部講師　　小松　光一

基調講演の要旨

私たちの先輩たちは非常に哲学的であったと思う。たとえば「はたらく」ということも、労働してお金を得るとは思っていなかった。はたをらくにする、つまり端を楽にしてあげる他者のためのサービスやものつくりのことをはたらくといったのだ。

そうして、いまあらためて、こうした昔からの知恵ともいうべき哲学の復権が始まっているように思えてならない。

なりわいもそうである。近代以後、私たちは「なりわい」を「収入」といってきた。お金になるのが近代だった。

こうしてなりわいという考えかたが否定されたのだった。なりわいは、生業ともいわれた。なるは成る、生るである。ものなり、ものを生み出す、ものづくり。これら総体をみいりといおうという考えは、自給から加工、販売へとつづく第６次産業化という概念を農業にもたらしている。たとえば、東京の練馬では、「風の学校」という市民農園がある。これは立派な学校（社会教育）である。市民が野菜づくりを学び、農家はその授業料をいただくという教育産業としてそれは終始している。

この多様な収入（実入り、身入り）を、農村再生の展望のなかに考えていこうというものだ。いわば、それは収入からなりわいへの転換である。

この転換は地域における働きかたの転換を生み出す。はたらくというのは実にはたをらくにするためのしごと、つまりボランティアワークとしてのはたらきかたのアイデアを生み出していく。

里山を活かすためのはたらきは、当然、多様ななりわいを生み出し、多様な収入（みいり）につないでいく。こうした、多様性が生み出す生命原理の豊かさが、里山の豊かさを生み出していくにちがいない。

プロフィール：北海道出身 64 歳。千葉大学卒業後、千葉県職員となり千葉県農村中堅青年養成所、千葉県農業大学校に勤務。平成 2 年千葉県を退職。その後、茨城大学、御茶ノ水女子大学、和光大学非常勤講師等を経て、現在法政大学キャリアデザイン学部講師として活躍。

・東金市田んぼの学校　元校長。

・「東金農業いきいきプラン」

（意欲ある農家 16 名が農業を元気にしようと取り組んだ計画）のアドバイザー。

主な著書　：

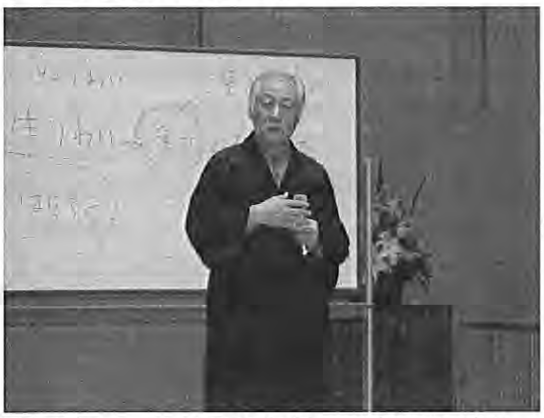
「おもしろ農民への招待状」「進化にむかう日本農業」「北タイ焼畑の村」

「自給と産直で地域をつくる一個性化する日本とアジアの農業」等

里山を活かす「なりわい」を考えよう

法政大学キャリアデザイン学部講師　　小松　光一

皆さんこんにちは。今日は里山となりわいについてお話をするのですが、最初に「なりわい」って何なのかについて考えてみたいと思います。



「なりわい」というのはよく分からない字ですね。一般的になりわいというと、仕事や収入と書いてあります。しかしこれは元々は、「生りわい」という言葉のようです。ここからやがて「生業」という言葉になります。ということは、なりわいというのはどうやら、ものが生る、それを使って業にしていく仕事ということになります。ということは、「なりわざ」からきたのかもしれないですね。

あなたのなりわいは何ですか、と聞かれるとなんて答えて言いかわからないですね。農業や林業といえば、それは生業になる。生業というのは、ものが生ったものを使って場合によっては収入にしていくということです。柿の実なんかは生らないですね。自分で食べたり人にあげたりボランティアですね。つまり、生業というのはよくわからないあいまいな収入の元ですね。この生業というのは江戸時代まではありました。しかし近代以降はこれがなくなりました。例えば、農業経営学にはなりわいというのは出てこないですよね。出てくるのは、民俗学や文学です。農業経営学に出てくるのは、収入・支出・利潤という言葉だけです。なりわいという言葉は、歴史的にずっと使われてきた言葉ですが、近代以降は使われていません。

つまりこれは、過去の言葉になったのです。したがってこの今回のテーマ「里山となりわい」という言葉は一般的にはおかしいのです。例えば今から30年前には、なりわいという言葉は通用しなかったでしょう。もっと近代的に、実業、産業にしようとなったはずです。

つまり、「里山と産業」と言えば分かりやすいですね。私たちは、かつて使ってきた古い生業という言葉、30年前には否定された、その言葉を今になってまた使っている、それは何故かというと近代をもう一回考え直そうという動きだと思います。バブルがはじけてもう一度考えて見たいというときに、なりわいという言葉が出てきた。リバイバルですね。現代に戻ってきたのです。

なりわいというと、当然収入、実入りがあります。ここから実入りという言葉ができます。柿が実るそれをいただく、売ってお金にする、食べて腹いっぱいになる、というようになりわいと実入りはセットだったのです。こういう風に我々はなりわいを考えてきた。なりわいというのは曖昧なものですから、本当にお金になるかわからない、なってもいい、ならなくてもいいというものです。例えば我々は「はたらく」という言葉を使いますが、どういう意味でしょうか。これは我々の先輩たちは、はたを楽にしたい、いわゆるボランティア活動ですね。そしてうれしいな気持ちよくなったな、楽になったな、お金をあげましょうという風になります。

つまり、働くということは、お金のためにやるのではないのです。働いて喜んでもらってそれでいいのです。場合によってはお金になるということなのです。ボランタリーワークだったのです。それをお金にするということは特殊だったのです。我々の先輩たちは働いて、自分たちの地域社会が良くなればいい、結果的にめぐりまわって自分たちの収入になる場合もある、という風に考えてきたのではないかと思います。働くというのはずっとボランタリーワークととらえられていたと考えていきます。

もうひとつは、「百姓」という言葉です。百姓という言葉は農民であると理解されてきました。これはおかしいと考えた人がいます。網野善彦さんです。彼は歴史学者ですから、ずっと調べてきました。昔の文献を調べていると、百姓イコール農民ではない、船頭の百姓。金貸しの百姓がいるのです。

つまり、様々なものを組み合わせて生きている人を百姓と呼んでいたのです。実際に千葉県でも本当に、林業だけ農業だけで生活している人は少ないですよね。多くは色々なものを組み合わせてやってきたはずです。千葉県の人は、昔、東北辺りでお米ができてそれが江戸に入ってくる、そうすると江戸では値段が高く売れる。それをみた千葉県のお百姓さんは自分で作ったものを担いで東京に出てきて売るということをしていました。これは流通業ですね。そうしたらこれは農民ではなく百姓ですね。

現代の農民は生産者といわれています。第一次の生産だけでなく第二次の加工、第三次の販売も自分でやる、ということは全部足すと百姓というのは第六次産

業になる。東金でもたくさんのお百姓さんがいます。がんばっている人たちは自分でお米を売っています。

例えば、最近東金市と、東金市の農家がつくった資料があります。「農業マップ」というものです。これにはお米をつくっている農家が写真つきで紹介されています。キャッチフレーズと連絡先が書かれています。生業で稼ぎ、働くということはボランタリーワークで、百姓というのは色んなことをやることというように、働き方、収入の得方が多様になっているのです。これはまさに民衆の世界・人々の世界です。我々の先輩というのはずっと近代の間こういう世界を生きてきたわけです。

日本の農民は、働くということを２つ考えてきました。「稼ぐ」「仕事」です。例えば、山仕事というのは仕事をしたからすぐにお金になるというものではない、ボランタリーワークに近いものです。山の神社の草払いもお金になりません。これは全部暇仕事です。これは百姓の世界です。同時にお金になる仕事、これを「稼ぎ」といいます。出稼ぎなどです。日本のお百姓さんたちは仕事と稼ぎを組み合わせて、バランスよく暮らしてきたのです。これがまさに里山の仕事ではないでしょうか。

里山の暮らしというのは生業と働くと百姓を組み合わせて成り立っているのです。この世界が里山における労働の世界です。なりわいの世界です。なりわいというのは、生業であり、働くことであり、百姓のことである。これはまさに豊かな世界です。

私は、法政大学講師、大地を守る会顧問をしています。私は非常勤講師ですから、パートのおじさんです。ひとコマいくらです。また、大地を守る会に行って原稿を書いてお金をもらってというように色んなことを組み合わせてやっています。合わせ業一本です。そういった意味では百姓に近いです。そうやって人々は生きてきたのです。

日本の農民は諸稼ぎ、田んぼは基本的に自給です。腹いっぱい食べることはできないでしょう。１反３俵以上はとれないですね、家族６人が食べて終わりです。ですので現金は、田んぼが終ったあとの農間稼ぎをするのです。田植えから稲刈りの間に時間が空くのでその間に別の稼げる仕事をするのです。または、田んぼの間に鯉を放す、これは隙間稼ぎといいます。こういう隙間稼ぎを農間稼ぎといいます。里山は人が関わってつくった世界です。手付かずの森に人が手を入れますと、それが里山になります。

山武杉は里山に近いですね。そして里が有り、その里人が山に入り手を入れていく、そうすると柿や木の実がなる、芝を刈る場所が出てくる、商品作物を植える場所が出てくる。それが里山です。田んぼがあり稲の間には鯉が泳いでいてそれを食べたり売ったりする。田んぼにいるタニシやどじょうを売って身入りにしていく。その風景がまさに生物多様性ではないでしょうか。佐原の小魚の佃煮なんかまさに田んぼの生産物です。そのように、人間が自然に手を入れることによって余業が生まれます。これは現金収入になります。例えば竹で籠をつくって売れば、これが隙間稼ぎ、余業になります。これをちゃんとつくれば工芸になります。また、夏田冬造という言葉があります。夏に田を耕し、冬にはお酒を造ります。そのお酒もまた工芸です。

こうやって日本の工芸は発達しました。これがさらに洗練されますと芸術になります。焼き物や紙すき、藍染めなども農家が余業としてやっていたものなんです。その中から、焼き物が好きで仕方ないという人が出てきてそれを工芸や芸術に高めていったのです。元々は農民がつくったものなのです、里山で生まれたものなのです。

私が今着ている作務衣はタイでつくられています。これをつくっている元のまゆはゴールデンです。これはクメール繭といいます。アンコールワット周辺で作られている繭を農家が買って、草木染にし、その後泥染めにしてこの色を出すのです。こういったものを農家のおばちゃんたちが生業としてつくっているのです。

このようになりわいというのは文化的に豊かなものをつくってきてくれるのです。かつてアジアでもこのようなものは廃れたのです。自分たちで糸をつむぐよりも東レ、東洋レーヨンという日本が化学的につくった生地を買えばいいやという風になったのです。村には東レばかりが出回ったのです。日本はその頃繊維産業が盛んでした。アジアの人たちは、出稼ぎで稼いできたお金をつかって東レを買う、そうすると際限なくお金がかかるようになってしまう。そのうち母親も出稼ぎにでるようになって村には老人と子どもしかいなくなってしまう。そうなってくると娘を売ることになるのです。この悪循環を断ち切るために、彼らはもう一度なりわいを取り戻そうということになりました。

タイでは、お金で布を買うような生活は止めよう、その代わりに家の周りにキッチン畑をつくろうということになりました。タイでは昔、森というのはスーパーマーケットであり病院であったといいます。お店も病院もない頃、贅沢をしたい時は森へ行って鳥を捕ったりしたのです。そして家の周りに屋敷林をつくって桑

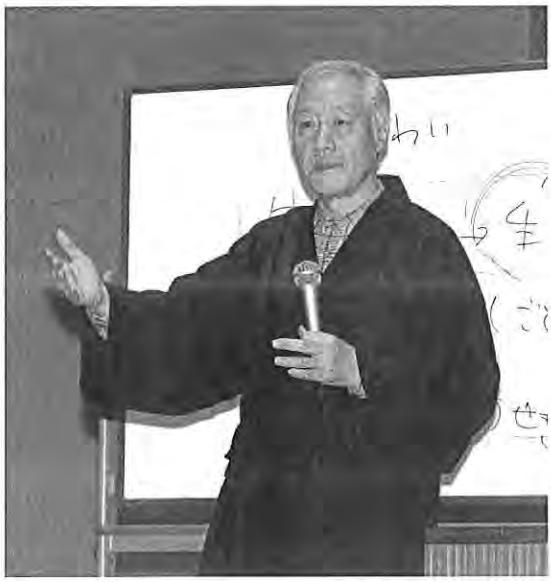
を植えてその下に草木染のための木を植えるのです。これから現金収入が得られるものをつくるのです。

日本の昔話に夕鶴というのがありますね、あれは畑仕事を終えた後に奥さんが夜毎機を織ってできたものをだんなさんが売るという話です。これこそ日本の百姓のあるべき姿です。お米は自給なので売れません、ですのでこういう織物などの工芸をつくって売るのです。こういうものをアジアの女性たちももう一度やり始めたのです。つまり出稼ぎでお金を稼ぐのをやめて、村で里山に手を入れながら暮らすことになったのです。

これはまさに、なりわいの回復です。また、インドではガンジーが糸車をまわそうと言いました。これはインドはイギリスの植民地にされて有名だったインド綿は完全にイギリスの下請けにされてしまいました。そこでガンジーが言ったのは、もう一度糸車を回そう、インドの誇りを取り戻そうと言ったのです。インドの出発点はまさにそれです。糸車を回すためにはコットンの木を植えなければなりません。コットンの木というのは本来３ｍくらいの高さになるのですが、これを家の周りに植えるのです。そして桑の木があり草木染の木があり、まさにこれは里山なのです。

ようするに、アジアではこのようにもう一度里山でなりわいをしていこうという動きがでているのです。賃金稼ぎではなく、なりわいとしてゆったりと生活しながら、場合によってはお金になるような生活をしているのです。例えばこのタイのおばちゃんたちは、消費者がもっときれいな色で染めてくれといえば化学染料を使って染めるのです。何が何でも草木染というのではないのです。そういう風にゆったりとやっているのです。

先日、私はフィリピンの映画を観ました。「アボン小さい家」という題のものです。日系３世の話なのです。これは戦争の前に出稼ぎに行った人たちの子孫なんです。彼らは色んな訳があって山の中で山岳民族として暮らしているのです。そして彼らがみんな出稼ぎに出るのです。それをせずにもう一度機を織って暮らしを立て直していこう、という話なのです。これはタイの場合と全く同じですね。つまり、里山のなりわいを復活させることによって、お金になってもならなくてもいいというスタンスで生活していく世界が、私は里山だと思います。



これに対して、治山治水の江戸時代の学者である熊沢蕃山という人が言っています。彼は元々岡山県にいて陽明学を勉強しています。やがて下総の古河に行きます。そこで勉強して彼が出した　結論はこうでした。何故江戸の町民は苦しいのか、それは参勤交代があるからだ。江戸の町というのは３分の１が武家屋敷なのです。この武家屋敷を全部森にしてはどうかということでした。参勤交代を止めて森にしてしまい、そこに町民が住む。生垣は竹にしてキッチンガーデンには桑の木を植えようということです。竹と養蚕です。竹というのはまだまだ無尽蔵の可能性をもっています。そのことに注目すべきだと思います。私の教え子は八千代で竹で農業を行っています。彼は竹で竹炭をつくり田んぼに撒いています。それだけで無農薬でできるのです。彼は全く畑にも田んぼにも化学肥料も農薬も堆肥も入れていません。農薬や化学肥料を入れると土は酸化するのです。使うのは竹炭だけです。これを大量に入れます。まさに土の力だけで作物をつくっています。竹でそういうことができるのです。

また、別の私の友人はカンボジアで現地の織物を復活させました。彼はこの前、日本の皇后陛下に会いました。そこで提案したのは、もう一回日本で手摘み手織りでつくる文化を復活させたいということです。工業用にシルクをつくるのでは絶対に中国にはかないませんが、日本のおばあちゃんたちが繭を買って手で織ったらどうでしょうか。かつて熊沢湛山が言ったのは、江戸中を里山にしてしまえということなんです。

しかも彼は竹と養蚕だといいました。これは先見の目があったのです。私たちはこれを改めて考えていく必要があると思います。まさに里山というのは新しい現代的なテーマだと、チャレンジしていく価値のあることだと思います。

先ほど堂本知事がおっしゃったように、千葉県というのは全部が里山です。縄文文化が花開いた豊かな場所です。もう一度改めて環境革命が始まっています。工業、産業ブームは終ったのです。新しい時代が始まっているのです。里山をベースにした暮らし方を考えていく時代がきたのではないでしょうか。まだまだ始まったばかりです。始まりに向けてチャレンジしていってほしいと思います。

これはまさに働く、生業、百姓、をやっていけば、我々はまだまだやることがたくさんあるではないですか。中高年も若者、不登校、ニートの人たちだってもっとやっていいのです。このように思います。

今日この後パネルディスカッションがあります。ここに登場する室住君というのは新農家です。生まれは千葉県船橋市ですが、彼は元ニートみたいなもんです。彼は農業という自分の仕事を発見したのです。里山はまさにこういった人にとっての舞台でもあるのです。たくさん里山はあるじゃないですか。がんばっていきましょう。終ります。

司会　どうもありがとうございました。森はスーパーマーケットでありお医者さんであるというお話がとても印象に残りました。やはりまずは里山保全に関わる私たちが里山の価値を再認識する必要があるのではないかと感じます。それではもう一度小松さんに拍手をお願い致します。

パネルディスカッション
里山に託す私たちの未来

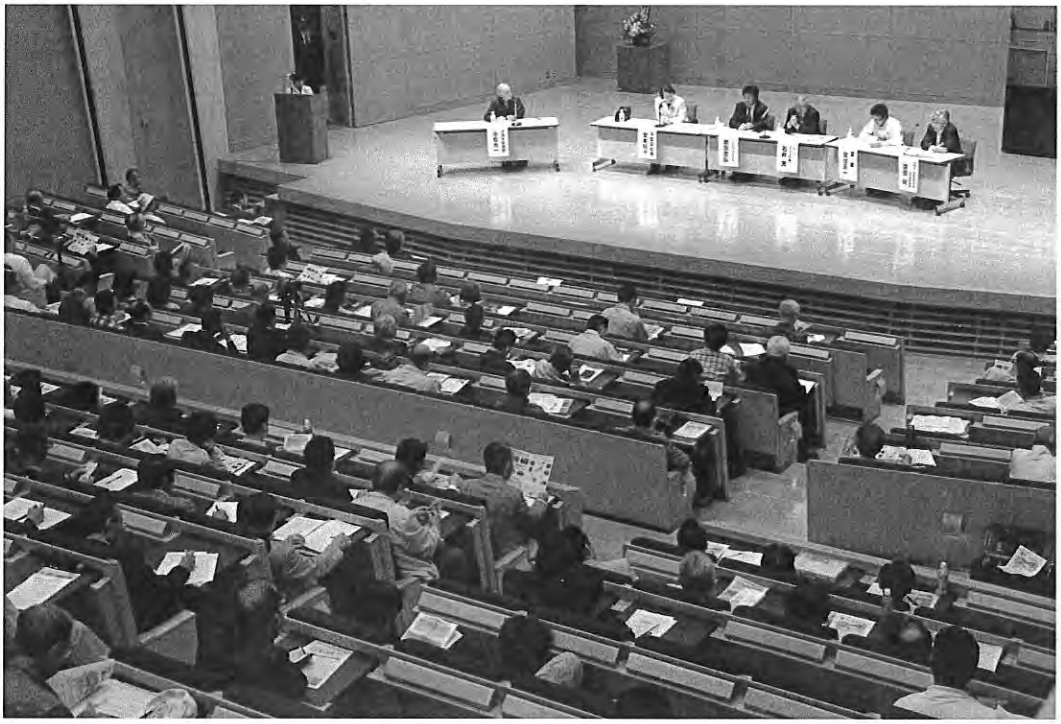
「里山となりわい」

パネリスト

堂本　暁子　（千葉県 知事）
室住　圭一　（農業）
石井　充　　（グループ「木と土の家」）
稗田　忠弘　（さんむフォレスト）
廣田　明　　（林野庁森林整備部計画課）

コーディネーター

小松　光一



堂本

京葉臨海工業地帯の中でも散々私は企業の方とも緑化の問題でお話しましたけれども、その中でもどういう風に保つかという問題と、里山の農業を守る、農業のあり方を守るように、農業ならある程度何とかできるのではないか、圃場整備として土を高くしたり、しかしそうすると本当の意味の循環はできなくなってしまう。とするとこの広い千葉県を里山で覆うことはできないかもしれません。しかしある部分については景観を守り、里山をみんなで守っていく、そのことを好む人たちがそこに住み守っていく、例えばひとつの市や町や集落がそういうことをやるということはできるのです。とても漠としたお話をしているようですが、そのようなことでもしないと、いずれ全部が壊れていってしまう。その生物の連鎖を断ち切らない部分を残していくことによって、壊れてしまった部分にも朱鷺が飛んでくる、東金にも朱鷺が飛んでくることが可能になるのではないかと思います。

司会　では順番にお願いします。

稗田　私は、山武杉を使って家づくりをしている「さんむフォレスト」の代表をしております、稗田と申します。私たちは、今自分たちが住む山武地域の山武杉の現状をよく把握した上で、山武杉による住まいづくりを提案しております。私たちのやっていることは、山武杉を使って、山武地域の大工さんや左官屋さんや建具屋さんなどの技能者が山武の民家をつくるという運動です。これはひとつの地域循環をつくっていこうという運動ですけれども、この山武を千葉という言葉に置き換えれば、千葉の家を千葉の職人さんがつくるということになりますが、ひとつのモデルとして山武地域で行っているのです。私たちが今している家づくりというのは、山武杉の状況が今とてもひどい状況になっている、日本の林業というのは全体的に荒廃している状況ですが、山武杉には特に非赤枯性溝腐病という病気が蔓延しておりまして、これは皆さんも杉の木をご覧になるときに分かると思いますが、幹が半分えぐれたようになってしまう病気に大半の山武杉がかかってしまっているのです。これは手入れが行き届かない現状が原因なんですが、そういう山武杉はほとんどゴミです。四角い柱をとるのに、半分腐っていてはそれがとれないのですから。ちょうど柱がとれるかとれないかという高さの場所が腐ってしまうということもあって、材としての価値がなくなってしまうのです。これはほとんどゴミとして扱われているのですが、実際には一軒の家の中で短い木材を使うところもたくさんありますし、使い方によってはちゃんと使えるのではないかと考えています。山武杉の抱えている問題というのをどう家づくりに反映していくかということを提案しております。また、地元の大工さんがつくるということに意味があるわけで、私たちは金物を極力使わない、伝統的な工法でつくろうとしています。今の家の、金物を使ったつくり方というのは、一般的に住宅金融公庫が始まってから金物を使って家をつくりなさいという指針を出してきて、今日本の家づくりのスタンダードになっているのですが、私たちの理解の仕方としては、住宅金融公庫のつくり方が最高のつくり方なのではなくて、あれは最低限の、せめてこれくらいにはつくりなさいという基準なのです。熟練した技能工がすぐに育つわけではありませんから、熟練していない大工さんでもこういう方法だったら家ができるでしょう、ということで出たのが金物を使った家づくりなんです。本来の住まいづくりというのは、日本の大工さんたちが延々と伝えてきた技能の伝承というのは非常に価値の高いものがあって、実際に私たちはそういうつくり方をしていますが、建てている現場で実感として、こんなに丈夫な家ができるのだということを肌で感じます。これは組み立てていきながら、その丈夫さに自信がもてるのです。これが本当の意味での技能なんです。そういうことができる方がまだいるうちに、できるだけそういう仕事場をつくって、それを継承してもらう努力をしていかなければいけないなと思っています。しかし残念ながら、私の知っている範囲でも、せっかく長年の間に身につけた技能をもちながら暮らしていけない、仕事がないためにハウスメーカーの大工さんになってしまうとか、ペンキ屋さんになってしまうとかがいるという残念な状況です。今は、約8割の住宅をハウスメーカーがつくってしまうということもあって、実際なりわい的にコツコツやる仕事というのが成り立ちにくいのが、今の現状なのです。また、一人でコツコツやるような大工さんにはハウスメーカーがつけるような補償の能力もありませんし、保険にも入っていないという方が多いのです。それに不安を感じる方はハウスメーカーに頼んでしまう。ただ、問題というのはこれまでのような流れで、谷津田や森林が荒れるということを、森林・農林業分科会で話し合ったのですが、実際にそういう大工さんがいなくなってしまうと山は荒れるのです。ハウスメーカーは、できるだけ安い材料を海外からもってきて効率的な方法で家をつくるのですが、地元の材を活用したコツコツやる家づくりというのは大工さんにしかできないのです。一番のもっと大きな問題というのは、せっかく長い間かけて家が建てられるほどお金を貯めたのに、それをハウスメーカーにぽんとお金を払って、契約書に判を押して私の家をつくってくださいと頼むと、その4割～5割がテレビの宣伝で流れてしまったり、また立派なパンフレットになってしまったりして、残るのはその5割～6割でつくった自分の家だけなのです。でも地元の大工さんに地元の材料でつくってくださいという頼み方をすると、まず地元の木を育てた林業家に少しお金がまわりますね、その木を運んできて製材している製材工さんがいますね、丸太を見てこの木からどういう木がとれるかという判断をできるというのは非常に優れた文化のひとつなのです。そういう人が生活できる。

司会　ちゃんと循環するということですね。

稗田　それを売る材木やさんがお金になって、その材木を半年もかけて手刻みをする、ということはその半年の間、その大工さんの家族は暮らしていけるということなんです。子どもは学校に行けるし、奥さんはお化粧ができるのです。そういうお金が地元に残っていくということがとても大事なのだと思っているのです。東京にどんどんお金が吸い上げられていくという今の仕組みにこのままるまる乗っていますと、地方は地域の人がせっかく貯めたお金をぽんと東京に持っていかれてしまい、どんどん貧しくなるのです。せめてそれを地元に残して地元がまわるようにしていかないと、地方っていうのはどんどんだめになるし、経済的にもだめになるし、森林も荒れるという悪循環になるのです。それを地域循環の上手い仕組みの中で解決していこうというのが私たちの提案です。

まず、私たちの住まいには必ず薪ストーブを入れるのです。というのは、化石燃料を使わないで冬の暖房をしてもらおうという意図なのです。一軒の家を、40坪の家を建てるとすると、私どもの建てる家は非常にたくさんの木を使うものですから、60 ㎥以上の木を使います。そうすると、丸太を製材する時にでた端材や切り落とした残材というのが約 40 ㎥くらいになるのです。とすると、40 ㎥の残材を薪ストーブに使って冬を越そうとすると、約4年は使えるのです。それが今みんなゴミになっています。材木やさんが丸ってお金をもってチップやさんに行って処理をしてもらうというのが現状なんです。それを全部エネルギー利用してやろうとすると、それくらいの量になるのです。ですから、岩手県の住田町のように、自分のところで第3セクターとして工場をつくってそこで出ている残材をペレットにして全部町民に補助金をつけながら配って燃やしてもらうということをやると、資源の有効利用になるということと、地球温暖化がこれだけ問題になっている中で有効な提案ができるのです。私たちはそういう家のつくり方をします。それは間取りから違います。ストーブ一台で家の中が暖まるようなつくり方というのはそのためのプランニングが必要です。また、私たちはエアコンをつけません。エアコンなしで夏を過ごしてもらうという住まいづくりを私たちはしています。これは無理して我慢してください、ではなくてエアコンがなくても快適に暮らせるのです、ということを家づくりをもって証明していると思っています。今まで、エアコンをつけないで設計して住み始めて、とても耐えられないからといってエアコンをつけた人はほとんどいません。ちゃんと住めるのです。というのは、昔からこの地域もそうですし、千葉県は全域そうかもしれませんが、蚕を飼ったり、涼しい家のつくり方というのは技能としてもっているのです。それに倣ってあげると、人もちゃんと住めるのです。そしてエアコンがどんどん嫌いになるのです。エアコンがかかっているような環境にいると頭が痛くなったりして、エアコンのない暮らしがいかに自分にとって快適かということがだんだんと分かってくるのです。そういうことを住まいをつくりながら提案してきています。これは地域循環の理念的なことは今日本中で言われていますけれども、特にこの千葉県は山武杉の問題が大きくありまして、その山の現状をどう理解してどう生かしていくかということが結局は林業家を元気にすることになりますし、それに関わって生きている大工さん、左官屋さん、大工さんという家づくりの技能者一人一人が元気になれる道だと思っているのです。そういういい技能者がたくさん住んでいるところというのは文化的にも豊かだと言っていいのではないかと思うので、続けていきたいと思っています。私たちの考えてきた考えを理解してくれて活動を始めたのが、次にお話しする石井さんたち「木と土の家」グループなのです。これからこの運動がうまくいくと経済効果も合わせて上手くいくと考えています。まだまだこれからですけれども、がんばっていきたいと思っています。

石井　この4月に発足したばかりですが、有限責任事業組合、略してLLPグループ「木と土の家」の代表をしております、石井充と申します。私の言いたい事は今稗田さんがほどんど言ってくれました。私は、材木屋というのは元々顔と口の悪い人間と言われていまして、でも心は真面目なグループでございます。私たちは、山武木材協同組合の中で危機感をもって、この山武の地域の林業、木材業、建築業の現状を考えたときに、非常な危機感と不安感をもったのです。その現状を打破するためにはどうすればよいかと考え、今稗田さんがおっしゃったように、さんむフォレストの考えを踏襲しまして、

我々の財産である名木といわれている山武杉の地元の業者としての利点を生かした、山武杉の地元で地産地消の住まいづくりをしていこうじゃないかという結論に達したのです。魚でいえば、トロだけではなく丸ごと全部を使うという、そして高いと言われている山武杉を、比較的安価な値段で提供して、それがまた大きな意味で言えば地域産業の振興、地域の山林の再生、地球温暖化の防止という大きな理想を掲げて活動しています。我々は 11 の会社が集まってできたのですが、大河も一滴のしずくからと言うように、この我々の落とした小さな 11 滴のしずくが、この山武地域に木と土の家として大きな大河となって表れてくれれば、我々が山武杉をメインとして扱える材木やになれば、それで収益があげられるようになれば、それが山武の森林も再生していけるのではないかと自負して行っています。どうか、これからもご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

司会　石井さんにお伺いしたいのですが、そういう家づくりって高いのではないかという印象があると思うのですがいかがですが。

石井　それは、私は比較の問題だと思うのです。我々がやっている「木と土の家」も坪 60～70 万になると思いますが、それを都内の同業者の人たちに見せて判断していただいた時に、これをつくるのは坪 90 万くらいかかるという判断を頂いておりますので、私たちは決して高いとは思っていません。安いと自負しています。

司会　普通は家を建てるにはいくらくらいかかるのですか

石井　一般的なハウスメーカーさんの建売住宅は坪 25～30 万と言っていますが、実際仕上がる時には坪 40～50 万近くにはなると伺っています。

司会　11 社共同することのメリットは何ですか

石井　それは有限事業責任組合というのをつくりましたが、我々一社だったら小さな会社ですから、みなさんに補償ができないですが、こうやって集まれば全員で完成補償から性能補償までできるということが一番のメリットだと思います。

室住　千葉県東金市で農業をやっています室住です。最初に小松先生から元ニートだと言われてしまいましたが、今は農業を始めて 10 年になります。私は東京に生まれて育ったのは船橋市です、その後タイにボランティア活動に一年半くらい行きまして、その時に東金市の農家の人たちと出会いまして、それが縁でここにいます。よく新規就農者は脱サラの方が多いといいますが、私の場合はサラリーマンの経験も一度もないので、脱プーとか言われます。正直一年目二年目が大変で、蓄えもなかったものですから、農業のアルバイトをやりながら、今日の小松さんのお話にもあったようにそれも全部含めてなりわいと言えるのではないかと思うのですが、そんなことをしながらここまで何とか最近になってお米と野菜で生計を立てられるようになりました。私は、先ほど言ったようにお金もなかったので大規模でやることは無理でした。現在日本の農業というのは大規模化、外国からの安い農産物に対抗するために大規模化してコストを下げてというやり方をしているのですが、一方で食の安全性、または環境の面もあるのですが、化学肥料を全くつかわない生産物の需要も高まってきまして、やはり大規模に展開しているとそういうのは非常につくりづらい状況にあるので、私たちスキマ農家の人たちが入りこめるのです。コストの面ではやはりかなわないので、そのかわり生産物に付加価値をつけていこうと、そうすると住み分けがちゃんとできますし、また無農薬というのが里山の保全にも役立っているような気もします。実際には私たちも機械を使いますし、配達する時には軽トラも使ったりしますので、CO2 も排出していますし、偉そうなことは言えないのですが、ただ私の考え方の一つとして聞いて欲しいのですが、昔農薬や化学肥料がなかった時というのは、虫に食べられないように旬を考えて季節に植えるとか、農家一人一人が考えて作物を育てていました。ところが、あるとき農薬が登場してきて、これを使えば草がでない、虫もつかない、手がかからない、ちょっとの量でたくさんの食物がとれるということで広まっていったのだと思います。そこでお百姓さんたちは一度考えるのをやめてしまったのです。それがあれば事足りてしまうのですから、自分たちで知恵を出すことを止めてしまったのではないかと私は思います。この前新聞で見たのですが、農林水産省がこれからは有機農業を大切にしていきたいということで、これまで何十年も有機農業をしてきた方々から知恵を授かろう、その技術を普及しようという記事が載っていて、時代も変わってきたの

だなと思いました。私が今やっている農業も間違ってなかったのだなとうれしく思いました。

話は変わるのですが、私がこの先ずっと農業やっていくかというのは、先のことはわからないのですが、私がここで今こうしていられるのはやはり周りの地域の人、農家の人たちに支えられてやっとここで生計を立てられるようになったのですが、その協力性が非常に心地よかったのです。元々農家の人なら、後を引き継ぐということでできるのだと思いますが、新規参入となると色んな難しい条件をひとつひとつクリアしなければならないということがあって、私も周りの農家さんに助けられながら私もそれをクリアしてきたのです。実際、若い人たちで非農家だけれども農業をやりたいという人たちが結構いるのです。よく私の家に泊まって朝まで酒を飲んだりしているのですが、そういう人たち全員が農業をやることはできないと思うのですが、中には一人二人できそうな人もいます。その人たちを応援してあげたいなと、自分が受けてきた親切を次の世代の人たちにも伝えていきたいのがこれからの私の目標です。私はやはり、有機農業というのをメインに掲げてやっていきたいなと思います。全国でも有機農業を盛んにやっている地域というのは結構あります。東金はまだそこまでの域には達していないと思いますが、いずれは東金を有機農業で有名な町にしたいなというのが今の私の想いです。

司会　そういう有機農業のやり方は自分ではどのように勉強するのですか

室住　今までやってきた人たちの意見を聞いたり、でもやはり最終的には自分で実践してみることですね。何十年も有機農業をやっているという人に話を聞いても地域が違うので風土も違うし、同じようにやっても通用しない時があるのです。ですので、自分でやってみてダメならそこを改善してみてという風にやっています。

司会　虫なんかの対策はどうするのですか

室住　虫の対策には、覆いをしてしまうのが一番いいのですが、あとはコンパニオンプランツといって同じ作物を大面積につくるのではなくて、少しずつ間にハーブを植えたり、アゲハ蝶がキライなミントを植えるとか、そうするとキャベツがそんなに虫に食われないとか、それでも虫はいます。私も野菜の袋詰めをしていて、自分で見つければ捕るのですが、お客さんにも虫がいたわよといわれます。でもこれはしょうがないですね。

司会　では廣田さんお願いします。

廣田　林野庁の廣田でございます。もう既に、堂本知事始め、皆さんが言い尽くされたかなと思いますが、改めて少しだけお話します。私個人的に田舎で小さい頃を過ごしていたので、風呂に入るには木を切って薪をくべて入ったり、お腹がすいたら山にはいっていって、アケビを採ったり自然薯を掘ったり、しいの実を拾ったりして炒って食べてみたりしていました。これが小松先生の言っているような、自然と一体になったなりわいの一部だったのかなという気はしています。ただ、時代と共に生活様式が変わって、そういう生き方が切り離された部分がでてきたのかな、それが里山が荒廃した要因のひとつなのかなと思っています。しかし、経済一辺倒という行き過ぎた振り子が戻ってくる中で、里山の価値をもう一度見直そうかという動きが全国で出ていると承知しております。今日ご発表になった13の分科会のお話を聞いていましても、皆さん非常に色んな視点から里山を捉えていらっしゃるなと思いました。こういうのがもっと広がっていったらいいなと思っています。特に千葉県は条例をもっていて、条例についても里山をどうしようかということで考えると、経済成長が高かった頃は開発規制という取り組みになったと思うのですが、これからはむしろ保全、再生という取り組みになってくるのかなと思います。

そこで、所有者が高齢になっているという中では、地域の中もしくは地域の外、都会に住んでいる方のお力が必要になってくるのかなと思っています。そこで、会場のみなさんにお願いしたいのは、石井さん、稗田さんも言及されましたけれども、使うことが山を、森を守ることだということですので、できることをやっていただければなと思います。できることというのは、色々あると思いますが、ボランティア活動に身を投じて実際に里山活動をやるというのもあるかもしれません、または募金活動で募金をするというのもあるかもしれません。さらには周りの方に木を使うことが里山を守ることであることを周りの人にも伝えていただくことが、山を守る活動になると思います。これから政府として美しい森林づくり国民運動を展開していくわけです。福井大臣政務官からもご説明がありま

したけれども、森を大切にしていく、里山を大切にしていくということと合い通じることがあると思います。ぜひ皆さんのご参加をお願いしたいと思っています。以上です。

司会　美しい森林づくり国民運動はなぜこの時期に、この運動が提案されたのですか

廣田　2月の頭に総理から、美しい国づくりを考える時に、その礎になる部分、森というのは古来から、色んな文化・伝統を育んできた部分でしょう。この森林が、今手入れが行き届かず美しくない部分もあるよね、この礎を気づくべきだというのが一つの契機だと思います。

司会　美しい国づくりは美しい森林づくりからということですかね。以上で5人の方にそれぞれお話いただいたのですが、お互いに聞いてみたいことはありますか。

堂本　廣田さんにお伺いしたいのですが、この「美しい森林づくり推進国民運動」の中で、里山がどう位置づけられているのかなと思うのです。白神や知床や屋久島などの原生林を守る、国立の公園ならきちんと守られていると思いますし、県立の公園や保全林など色々とありますが、また人工林や今度は育成林と呼ばれるようになりましたが、里山はある意味で言えば、農業地区の中に位置づけられてしまって、例えばちょっと様子が違うのですが、スイスの場合なんかは、一本の木を切るのにも許可が必要、カナダなんかはあんなにたくさんの木があってもバンクーバーの中ではなみずきを切ったら投獄されるくらいなのです。これは州花だからなんのですが、そういったことで言うと、農地という括りの中で里山がどんどん切り開かれてしまって、里山がどんどん壊れていってしまうという実態があると思うのです。林野庁の考えで言うと里山の住み分けは難しいのだと思いますが、今日午後からずっと一連の話になると、人のなりわいが田んぼや林や川や海や森と融合した形で捉えられての話なんです。これを政府はどのようにキャンペーンの中で位置づけてくださるのか、ということに感心があります。

廣田　まず、里山の捉え方に難しい部分があると思います。知事さんの意見に私は同感です。これから展開していこうとしている運動は、実は官主導ではなくて、役所主導ではなくて、各界各所の皆さんにこの運動の母体になるものをつくって頂いて、ご提言をいただくことを考えています。パンフレットでは漠と美しい森林づくりというような言い方になっていますが、当然近くの森をどうしていくのかということも一つの大きな課題だろうと私は思っています。

堂本　そうするとこの国民運動から離れて、林野行政として里山というものに対して、里山というのは非常に日本的な文学的な表現なのかもしれません、林業からいうと、この里山というものに対してどのような位置づけがあるのか、個人的なご意見でもいいので伺えたらうれしいです。

廣田　まず、里山を考える時に二つあるのかなと思います。まず、広葉樹で薪炭林としてつくったところと、戦後はげ山になったところに杉を植えて人工林になったところと二つあるのかなと私は思っています。それで、そういうところを違うように扱うやり方ってあるのではないかな、例えば山武杉が植えられているところはそれを材として使っていただく道でしょうし、元々薪炭林で経済的に得るものがなくなったから手を入れなくなって荒れているところというのは、お金じゃない価値というのが今みなさんの関心事項になっているわけだから、それをてこに整備を進める方向に考えるしかないのではないか、先ほど申し上げましたように、ボランティア活動、NPO さんがやっておられる活動であったり、所有者さんだけが整備するというのではなく、先ほど知事もおっしゃっていらっしゃったように。みんなで守る、地域で守るというようにやっていかないとなかなか里山というのは、再生は難しいのかなと思います。

稗田　今の森林の再生のお話なのですが、よく川上、川下を林業の話でするのです。木ができる一番上の川上から、一番下の川下への木材の流れというのが、非常に悪いのです。これは使われないからなのですが、決め手というのは難しいのですがまずは家をつくるということ、これはたくさん木を使いますし、国産材でできるだけ家をつくりましょうという話になるのですが、他に、先に申し上げましたように家

一軒をつくるとそれに見合った残材がでるのです。その残材をエネルギーに利用するというのは、第一次オイルショックの後というのは木質バイオマスエネルギーというのは注目されて、ペレット工場が日本中にできたということがあったのです。しかし、石油の値段が下がると国の補助金が切られてしまうので、ペレット工場がどんどん閉鎖してしまうことになったのです。今千葉県で最も近いペレット工場は奥多摩にあります。元々は岩手県で盛んに取り組んでいて、今では岩手型ペレットストーブというのができているくらいで、あちらが主流で行っているのです。ペレットというのは、木を高圧で押し出して顆粒状にしてあげるのです。そのペレットストーブというのは人が薪をくべるのではなくて、タンクにペレットを入れておけば自動的に温度管理をしてくれる、だから住宅ばかりではなくて工場や役所でも十分に使えるのです。岩手県のように町をあげてこれに取り組んで、そのために補助金をつけてあげれば普及するのです。2 年前くらいまでは石油よりも安く暖房ができたというくらいになったのです。これからますます石油事情が悪くなってくると、当然また盛り上がってくる話ですし、今のバイオエタノールの話もそうですね。おそらく木は捨てるところがなくて、エタノールの原料になるかもしれないし、私たちがやっているように直接的に薪になるかもしれないし、それを二次加工してペレットになるかもしれない、本当に捨てるところのない宝物になるかもしれないのです。しかし現在では、今ゴミ扱いで邪魔者扱いされているのです。ただ、これが実は森林再生を話すときに出ない話なのですが、木を使って家を建てましょうという話はでるのです。できるだけ千葉県は千葉県の木を使って家を建てましょうと運動するのですが、実はその末端の残材になってしまった部分をきれいに利用して川の流れをよくしてあげると、木ってすごく出てくるのです。山の再生ってこういうところがポイントかなと思っています。今私たちのつくる家に薪ストーブを必ず入れているというのは、灰になるまで木を使いきるということが、とても大事だと思うのです。そこに力を入れた、木質バイオマスをエネルギー利用しましょうということを国が背中を押してあげると、できるところはたくさんあるのです。今、千葉県で**バイオマスタウン構想**なんかが出ていますけれど、結局炭にするということしかでてこなくて、では結局炭にしてどうするのというと、畑に入れます、川を浄化しますということになるのですが、実際にはあふれちゃっているのです。ですので、手を加えてあげることで直接的にもっともっと役に立つ仕組みができるわけですから、その部分の川下の掃除をしてあげるともっともっときれいに流れるようになるのではないかなと思いまして、国の政策としては木質バイオマスをもっともっと、有効利用して欲しいと思います。

司会　暖房というのは、ひとつあれば家中暖まってしまうのですか

稗田　そういうつくりかたをしなければいけないです。例えば８畳の部屋にストーブをいれたら、８千キロカロリー～１万キロカロリーの容量がありますから、ゆだってしまいます。そんな使い方はもったいなさすぎるのです。やはり一台で一軒が暖まるような一体感のある家のつくりかたをする必要があるのです。私が思うのは、木の産地の景観として、そういう一体感をもった家が存在できると思うのです。昔からある民家をみて千葉らしいと言うじゃないですか、あれを千葉らしいというのは、そこの風土を反映して生まれてきているから千葉らしいのです。私たちの目指すのはそこなのです。非常に**大上段**でなまいきなのですが、そこまでいきたいと思っています。これが千葉の民家だといわれるようなものを、今の風土に、今の森林の状況を反映したものをつくり続けていけばそういうところに到達できるのではないかと思ってやっています。

司会　他にいらっしゃいますか

石井　知事さんにお尋ねしたいと思いますが、私たちは業者ですから、山林の保全等々大事だとは思いますが、先ほどもお話が出ましたけれども、山林は木を出さなければどんどん荒れていってしまう、木を出すためにはその需要を喚起しなければならないのですが、我々は何でもなんでも補助金だという考え方は好きではないのですが、公共事業などで地元の木を県内産の木を使ってくださいと言った場合に、ただそれだけの積算をすると高くなってしまうのです。単価としては地元の木を使う方がかかってしまうのですが、先ほどもでたように、地球温暖化の減少、里山保全、地産地消とトータルした場合にそちらの方が安いのではないか、そういう発想はないのですかとお伺いしたいです。

堂本　そこまで、温暖化の問題等を積み上げて取り組むということは難しいかもしれません。私がお話を聞いていて思うのは、もっとキャンペーンなどで民間の方に宣伝していくことだと思います。やはり今、千葉県はいい意味での PR が下手だといわれているのですが、千葉の木山武杉でもいいですし、山武杉以外の木でもいいのですが、千葉産の木で家を建てましょう、家具をつくりましょう、もっと小さなお

もちゃをつくりましょうと、もっともっと宣伝をしたらどうかなと思ったことが一つ。それから、積極的に工事などに使う場合に値段が高いので、外材と競争したらまずやっていけないと思います。家具なども、外材を使ったとても安いものが多くある。これを山武杉でつくってもおそらく値段が高くなってしまう。ですが山武杉の美しさ、千葉の風土のなかでの美しさ、私も知事室へきて一番最初に、ちょうどいいワーキングデスクがなかったので、どんな高級な家具を買うよりも山武杉でつくったものがいいのではないかと思い、県の作業をしているところに行ったら、丁度100年の大きい木があったのでそれを机にして、今私が朝から晩まで作業をしているのは山武杉の机の上なんです。天皇皇后がいらっしゃる時には、他にも机や椅子がないわけではないのですが、それは全部片付けてもらって、宮内庁の視察の時には山武杉でつくった机を真ん中にでんと置いたのです。それを切る時に年輪を知りたいからとっておいて欲しいとお願いしたら、明治元年くらいに芽が出たことがわかりました。それをみて。皇室にとっては年号が大切だったのでしょう、それをじっとご覧になって大変それを楽しまれていました。皇室に限らず、私たちの日常のなかで、徹底的にどう宣伝できるかというもっと科学的に今のようなシステムをつくって下さっているのであれば、ハウスメーカーよりも木の匂いがして触ると艶が出て味の出てくる木材なんだということを、徹底的にみんなに分かってもらうことが大事なのだと思います。家全部をやらなくても、壁の一部などでもいいでしょうし、私も小さな山小屋をひとつ借りているのですが、そこでは薪を焚いています。木を切ったり、火の色をみるのはとても好きなことで、CO2 を排出しているのかもしれませんが、それでもとても心温まりますね。文化的な電気を使う生活もいいかもしれませんが、もう少し私たちは自然のリズムにあった生活、なりわいがどんなに楽しいものなのかという

ことをもっと身近に伝えあい、学びあい、楽しみあうということも大事だと思います。県庁でできることも検討させていただきますけれども、なかなかCO2 の排出量まで換算することは難しいので、違う方法を考えたいと思います。

稗田　知事のお話に、先ほどからも感じていたのですけれども、知事は山武杉が高いと思ってらっしゃいますよね。しかし実はそうではないのです。安いのですよ。それはいいところは高いですよ。マグロだってトロは高いのですから。

堂本　たまたま私の部屋のは高かった・・・なぜって私はてっきり県庁が、知事が毎日使っている机ですから県で出してくれるのだと思っていたのです。しかしある日机の上に請求書があって堂本暁子様と書かれていたのです。県は一銭も出してくれなかったのです。

稗田　マグロで言えば大トロのところだったのですね。山武杉もトロの部分は高いのです。しかし庶民の暮らす家というのはそんな部分は必要ないのです。昔私はこの運動を始めた時に、昔の人は自分の家の裏山の木を切って家を建てたのではないですかって言ったら、そうではないと言うのです。裏山の木は売ったのだと、そこで売り物にならないような木で自分の家を建てたのだと言うのです。家の柱は節だらけだよ、でも節だらけでいいじゃないということなんです。そういう木なら安いのです。今、知事のいらっしゃる松尾辺りでにんじんのシーズンですが、この頃になると山が赤くなるのです。というのは、農家がにんじんの仕分けをするでしょう、ちょっと傷があるとか長さが足らない、太田市場に出せないにんじんはコンテナに詰めて山に行って空けてくるのです。だから山が赤いのです。そういう風に木も使われてきたし、本当にもったいないのです。先ほども石井さんが言ったけれども、マグロならカマから中おちまで全部用途を見つけてやれば単価は下がるので、知事がおっしゃるように決して高いものではないのです。

堂本　では私が、山武杉のヒレまで使った小さな家をつくって、みなさん見てください、こんないい家がこんな値段でできました、と言ったらみなさん来てくださるかしら。そうしたらマグロではなくて千葉で捕れた魚と野菜で食べましょう。

司会　それができたらいいですね。千葉県のシンボルみたいなものですね。こういうのができたら室住さんどうですか、行きますか。

堂本　じゃあ野菜つくってもってきてもらおう

室住　まかしてください。そこで販売させて下さい。

司会　先ほど知事のお話の中に合ったように、暖炉で火

を焚くと人が集まるっていいますよね。

堂本　私は昔から囲炉裏も好きなんです。囲炉裏というのは家族の集まる場で、そこでおしゃべりをしている、近所の人が来て・・・と、本当に好きなんです。廣田さんが愛知県で育って森に行ったとおっしゃっていましたよね。私も年齢からいって疎開をしたものですから本当の自然の中で育ったのです。その育ち方というのも、何にもなくなってしまった、セリを川に摘みに行って山菜を採って栗を拾って、川では石をひっくり返してカニを探して、そういうものを食べたのです。しかしこの平和のときはものも食べるものもあふれていて、つくったものをチンとすれば何でも食べられる。でも、それはとても自然と人間のなりわいを淘汰しているのです。ノビルなどの色んな草を摘む中で、蛇に出会ったり昆虫に会ったりするのです。こんなところにスミレが咲いていたのだとか上にアケビの実がなっていると、これはあの子には教えないでおこうと秘密にして毎年なるのを楽しみにしていたり、グミの実や桑の実を採るということはとても自然に近いですね。私は信州だったので、浅間山まで浅間ベリーを採りに行きましたけれども、とてもきれいな朝焼けの中でベリーを摘んだ、そういう時自然と人間が一緒になっていて、自然がなければ人間は生きていくことができないということを、我々の年代の人間は嫌というほど感じざるを得なかったのです。しかし今はそれが遮断されていることが多い、セメントなど、そういう文化的遮断を取り除けば、廃棄物などもこんなに来ることはないし、やはりとても腹が立つのはこんなにきれいな谷津田に残土や産廃が捨てられたら、みんな悲鳴をあげていますよ。私がいつも本の書き出しに書くのは、不思議の国のアリスのように動物たちが話すのならば、カエルもタニシも昆虫たちも、もう止めてくれよ人間たちと言っていると思うのです。何か辛い思いをしているひとはいませんか、というのが千葉県のキーワードですが、それを植物や動物にも聞いてあげたいと思うのです。そうするともっと自然と私たちの間の文化的な自然のなりわい、動植物や水など、人間はその中の一部なんだ、自然のリズムに合わせてというお話もでていましたけれども、なりわいを表現する時にその自然のリズムに合わせて私たちがいきていければ豊かな生き方にもなるだろう。それを否定する方もあるかもしれない、エアコンの中で外国にもコンピューターで連絡して、そういう生活と自然との調和する生活が矛盾するものでもないので、それを両立させるように考えていく知恵を私たちはもっていかないと、自然からのしっぺ返しを人間がいつか受けるのではないかなと思います。今日は里山、里海をもう一度生き返らせ

る決心をするような日であってもいいのかなと思います。

司会　会場の方からも質問があれば出していただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

浜辺　東金市の農民の浜辺と申します。今日は本当に偉い方々と一緒になれて、皆様のお骨折り非常に感謝しています。それでは、里山をどういう風にして守るか、里山をとのようにして守ってきたかという過去を振り返ると祖先から学ぶべきものがたくさんあると思います。それで里山というのは端的に申しますと、地元農民の血で守ってきたのです。そのおらがおらの山に勝手に竹の子を掘って行って勝手に木を切って行ったなど、些細なことで個人的なことでの争いもありますが、町有地の里山もあります。そこにある山荘は秩序として農業道徳をもっています。そのために水を守る、田を守る、土を守る、私らは部落で長老に聞いた話に、一枝一指、一木一腕、無断で共有地の枝を切ったら指一本とられる、無断で木を伐採されたら腕一本とられる、森を大事にしないと農業用水を確保できない、そして同時に森から出た水は農村村落の中に川になっていきます。そこで米を研いで飲み水にしています。私たちが子どもの頃は魚を捕まえに行って、そこでおしっこをします。そうするとお前ら曲がるぞと怒られた、そのように幼い頃から里山を守るための教育がされてきました。近年、都市化されて里山の荒廃について小松先生にもご尽力頂いていますけれども、団塊の世代や都市住民の方々が、農家の荒地を開墾していただいてますけれども、農村に入るからにはたとえ一畝しか借りていないという人たちにも、その土地土地で守ってきた歴史をやはり教育しなければなりません。教える人がいなければいけないのです。しかし最近は核家族になってしまい、若い人たちは東京へ出てしまい里山を守るどころではない、昼間農村においでになれば分かるでしょう。もう明日あさって死ぬじいさんばあさんと数少ない子どもしかいません。赤ん坊の泣き声なんてめったに聞けません。鯉のぼりだってめったに上がらない。というわけで、農業と農村を守るためにはそれなりの秩序を教えなければならないのです。そう思って言わせて頂きました。

司会　他にはいかがでしょうか

安井　山武市の安井でございます。なりわいの原点は私が先人の中臣鎌足の言い伝えによれば、いわゆる祝詞、山の幸海の幸野の幸が自然に採れるのを祝う、なり祝うからなりわいになる、という鎌足公の言葉が伝わっています。日本の昔からの用語であると解釈してよいと思います。以上です。

司会　では、もう一人お願いします。

上善　千葉市から参加している上善と申します。先程堂本知事から山武杉の木材が売れないのは、宣伝が足りないのではないか、という発言がありました。単純に宣伝だけの問題ではないと考えます。山武杉を認識していただくため、山武杉の歴史的経過をお話します。

山武杉といえば千葉県を代表する林地（森）であり、良材が産出されることで有名でした。しかし、山武杉は始めからいい林地ではなかったのです。千葉県山武郡睦岡村（現在の山武町）のアララギ派の歌人で山林経営者だった蕨真一郎さんが、明治末期に杉、松、広葉樹が雑然としている山武の森を見かねて改造しようと思い立ったのです。歌人としての審美眼には、山武の森林は美という観点からほど遠いものだったようです。美林から良材が出るのは林業技術では常識です。かって見た、信州・木曽山のような美林を北総に再現したいと蕨さんは考え、私

財をなげうって地元に農林学校を設立。人づくりから森づくりを始め、栄光ある千葉県の山武杉が美林に育ったのです。

ところが山武杉の現状はどうでしょうか。管理不十分で溝腐れ病が蔓延して倒木が目立ち、放棄されたゴミの山など惨憺たるものです。どうにも我慢ならないのは、山武の森になぜ「秋田杉の住宅」が出現したのでしょうか。林業の構造的不況の煽りを受けてこのような森になったのは一理ありますが、良材を産出している林業地には人の心が結集しています。行政がこれからの山武杉のことを考えるなら、全国各地で立派な森林を育て、良材を産出している林業地に倣うべきです。

良材産出で代表的なのは宮崎県諸塚村（もろつかそん）、高知県寿原町（ゆすはらちょう）、奈良県川上村ですが、これらの地域では県政と村政、村民が一致協力して立派な山づくりをしています。いづれも、県庁所在地から車で２時間以上かかる僻地です。中でも宮崎県諸塚村に少し拘わりましたので詳しく述べます。この村では戦後６０年の村行政の中心を人づくりにおいてきました。教育立村を唱えながら、多くの人材を育て美林を育てました。近年では（注1）メキシコに国際本部がある「森林認制度」ＦＳＣを取得し、産出する材に付加価値をつけ林業経済的にも多大の効果を挙げています。私が言いたいのはここからで、諸塚村では住宅の産地直売システムを確立しています。ＮＨＫが全国に放映したので先刻ご承知と思います。諸塚村の産直システムとは、都会の人が家を建てる時、村を訪れ山林を見て木材を買い付けます。山主と施主の結びつきがここから始まり、住宅の完成後も親戚づきあいのように互いに行き来しています。千葉県でも山武地方にこのようなシステムを確立して地元が活性化するように県政で支援されては如何かと思います。

）

稗田　産直住宅のことは承知しております、参加はしていませんけれども、諸塚の大変田舎にある村ですが、施工者は東京や大阪や色んなところにいるのです。それはその仕組みをつくった方の力量は計り知れませんし、それを外れずに続けていく努力も大変なものだと思います。ただ、ひとつの成功例としてありますね。今おっしゃったような、建具師が山に木のあるところからみるというのは、東京の木で家をつくる会なんかもやっています。木の見学会をやってから家を建てましょうという、しかし私たちはそういうことはあまりやってないのですが、たまたま今石井さんと一緒に、私が設計をして石井さんが工事するというのをやっているのですが、石井さんが山で木を切ったよ、というタイミングに私が施主さんにご連絡して家族でみに来るのです。子どもは木に上がってみたり、泥だらけになって喜ぶのです、きっと強烈に印象に残るのだろうなと思うのです。その方は船橋の方ですが、自分たちがまさかこんな風に家を建てられるとは思ってもみなかった、元はどこかの分譲地にハウスメーカーに頼んでつくろうかとしていたのをたまたま私と知り合ったのです。そういう意味では、これからもっと森林に対する認識を深めてもらうためにもこういう見学会などの必要性はあるのだと思います。

司会　田んぼの学校や市民農園はあっても、まだ森についてはそういう事例は少ないですね

稗田　専門家の領域で人は入れないような雰囲気がありましたけれども、そういうところからみてもらえることが大事ですし、先ほどのストーブの話もライフスタイルの転換だと思うのです。意識改革です。よくいうのですが、大塚家具に行くと色んな家具が売られてますが、全部テレビ中心に配置された家具なんです。

やはり新しい家族の中心として自然の炎がある、その周りに家族や近所の人が集まって、酒を飲んだり話をしたりする、そういうこれまでの生き方を転換するような部分と、千葉の木で家をつくるというのが結びついてもらえないとなかなか本物にならないなと思っています。諸塚村の例なんかとても参考になります。ありがとうございます。

堂本　実は知事公舎というのは４０年も経っていてボロボロで中の壁が染みだらけなんです。それを我慢して使っていたのですが、さすがに６百万県民のいるところで、こんな汚い公舎に人を通すことはできないと人に言われて考えたのですが、私はやはり山武杉が好きなので、山武町の蕨さんにとってもすてきな組子をつくっていただいて、今までガラスだったところにその組子を入れてカーテンをやめまして、山武杉のきれいな障子にしていただいて、見違える

ようになりました。やはり１７代目だそうですけれども、蕨家というのはずっと建具をつくってきて、何故私がそのことを知ったかといいますと、この間町村合併のときに、山武になったのですが、その時に松尾、山武、蓮沼、成東の調書を読んだのです。その時に山武は建具、山武杉抜きには考えられない町だということで、ご挨拶をしました。そして江戸時代から山武杉の建具で栄えてきた町だということです。そこで私は、やはり千葉県のものを入れるのがいいということで、知事室も杉ですし、知事公舎の欄間も山武の建具で組子になっていてとても美しいです。外国からのお客様をお通しすると皆さんなんて美しいのだろうとおっしゃいます。そのたびに私は、これは山武のですと威張ってます。威張れるだけのものがあるので、ぜひ皆さんも家の中に本当に小さなものでも一部に組子を入れるだけで素敵になりますし、誇れるものになると思います。

上善　山武杉の欄間の話がでましたけれども、25年前に東大の筒井教授を中心とする森林文化教育研究会が東金市から山武市一帯の調査をしたときに聞いた話です。かつて、東金は関東一円に建具を出した街で日向駅の積み込みもあったらしいのです。しかし２５年前には日向の駅前に一軒だけ欄間を作っている家がありました。今それがあるのか、思い出しました。

司会　時間になりましたので、最後にパネラーのみなさんに一言ずつ話していただいて終わりにしたいと思います。

石井　知事がこんなに山武杉のことを勉強して宣伝してくださるとは思ってもみませんでした。それと、先ほど宮崎県の例を出していただきましたけれども、東国原さんと堂本さんと違うように、宮崎と千葉では多少やり方も地域性も違うと思いますので、それは参考にさせていただいて研究させていただいたら大いに勉強になると思います。これからも「木と土の家」よろしくお願い致します。

室住　里山の保全ということを先ほどから色々お話があったと思いますが、やはりそこには人がいないとどうにもならないという事で、それを改善するひとつの例として、里山のパンフレットにもあるような絵の景色を欲している都会の人たちも大勢いて、そういう人たちと田舎と都市の交流を積極的に進めていけばとても楽しいし、いいのではないかと思います。お金を儲けることは難しいと思いますが、お金を儲けることはある程度でよくて、あとは人とのつながりを大切にしていけばすごく楽しい人生になるのではないかなと思います。

廣田　先ほども申し上げましたけれども、戦後植えた木というのがこれから利用できるようになってくる、そういう中で、新しい技術革新ができてきた今を捉えて森林の再生をしていかなくてはならないだろう、それは里山をまた別の視点から取り組むものがあるのだろう、例えば癒しだったり、森林環境教育だったりであると思います。ぜひこのシンポジウムを機会にみんなでできることをやりたいと思います、よろしくお願いします。

司会　時間になりました。先ほども知事さんがおっ

しゃったように、みんなで参加して里山を守っていく、人が里山に入っていく仕組みをつくりたいと思います。終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

司会　パネラーの皆様、小松さん、お疲れ様でした。どうもありがとうございました。議論は尽きないと思いますが、これでパネルディスカッションを終りにしたいと思います。もう一度みなさんに拍手をお願い致します。大変お疲れ様でした。この後の交流会にもぜひ皆さんご参加下さい。では閉会の言葉を、実行委員会副代表であります栗原よりご挨拶させていただきます。

栗原　みなさま遠くからこの東金の地にお越しいただきありがとうございます。パネリストの皆様もご参加いただきありがとうございました。この半日の時間を有意義にお過ごし頂けましたでしょうか。感謝を申し上げます。我々一同精一杯がんばりました。今年は４回目ということで「なりわい」という題でした。昔日本は農が中心で、色々ななりわいがあって衣食住全てが農を中心にまわっていたと思います。それが近代化の中で、科学技術がつくられ工業化が進んだ中で、なかなかなりわいというものを、農を中心に行っていくことが難しくなってきました。しかし先ほどもお話がありましたように、新しい価値を見つけていく必要がでてきた、日本人の今の生活様式の中で、食べ物のせいもあると思いますが、日本人の血液はかなり汚れているといいます。そういうものを我々の生活を見直す、社会を見直すことによって考えていけるのではないかと思います。

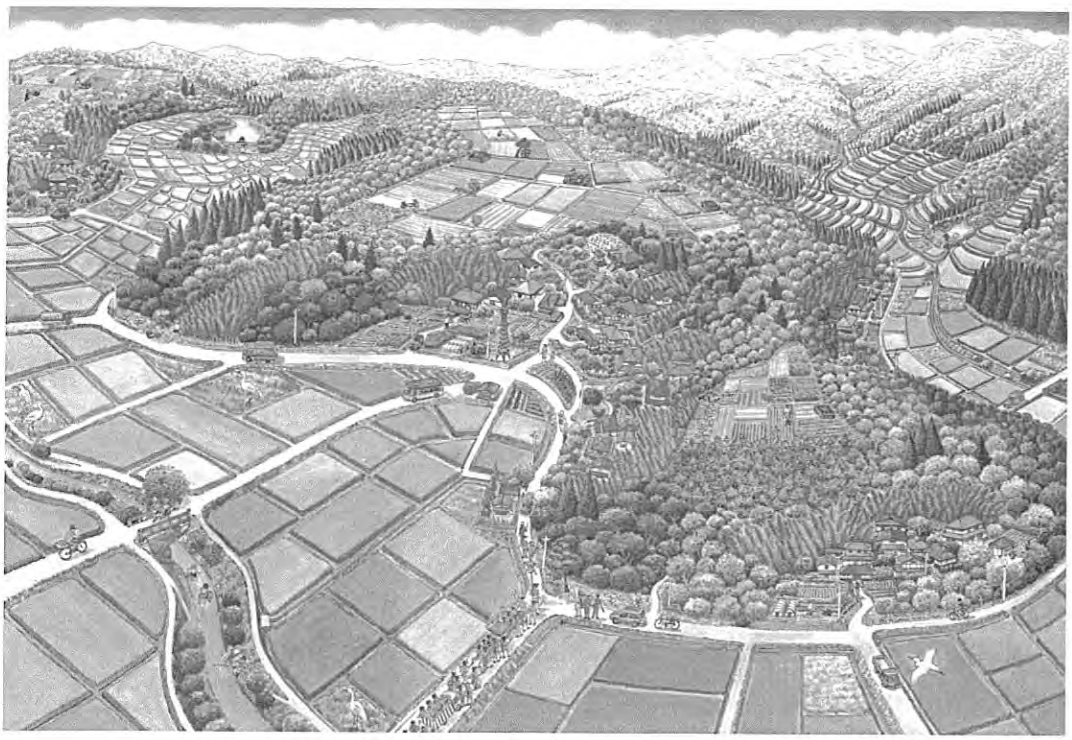
今回で４回目を迎えたこの里山シンポジウムも、いろいろな形で行政、市民、地元の人たちに話し合いの場を提供することになってきたのではないかと思います。４年前はぎくしゃくとしていましたが、今では市民と行政が同じテーブルについて話し合いができるようになってきました。ただ、まだまだこういう試みは続けていかなければならないな、と思っています。市民が自分の現場からの話をしていく、今までの政策はどうしても行政の組織の都合のいいようにつくられてきたような、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、市民からはそういう風に見える面もありました。これからは市民と自治体、行政が一緒になって地域をどうしていくかという中で、行政の仕組みも変えていこう、行政の仕組みがあって政策があるのではない、ということを最後に申し上げて終わりにしたいと思います。みなさん、本日はどうもありがとうございました。

（注１）森林認証制度　（略称：FSC）

（Ｆｏｒｅｓｔ　Ｓｔｅｗａｒｄｓｈｉｐ　Ｃｏｕｎｃｉｌ）

環境保全面からみて適切で、社会的な利益に適い、経済的にも持続可能な管理をしている森林経営者の森林を認証する制度。その森林から産出された木材、木材製品に「ＳＦＣ」のロゴマークを着け、幅広く消費者に流通させている。「ＳＦＣ」の焼き印が押された製品は若干高価だが、消費者は間接的に森づくりを支援していることになっている。

第４回里山シンポジウム１３分科会
報　告　書



里山の夏　　浅井粂男・画

第１分科会「八千代の里山を語る」

里山保全の意義と先進自治体の施策を学ぶ。
また八千代市の現状を把握し、市民団体・行政・土地所有者の連携を図る。

日　時：2007年3月31日（土）13:00～16:40

場　所：八千代市郷土博物館学習室

参加者：37名

趣　旨

里山・谷津を保全するために、意義と先進的に取り組みを進めている自治体の施策を学び、八千代市の現状を把握し、市内で活動している市民団体・行政・土地所有者（農家）間の情報交換と連携を図るためにおこなう。

内　容

講演１

里山の現状と活かし方」　講師　金親博榮氏（ちば里山センター会長、谷当グリーンクラブ代表）

県内には特徴ある森林が地域ごとに存在。里山は条例で、「人が日常的に営んでいる地域に隣接し維持管理されてきた一団の樹林地または樹林地と一体となった草地・湿地・水辺」と規定。

県内の森林・農地は30年間で5万ha減少。

要因は

①宅敷地化

②その他の建物敷地化

③ゴルフ場

④鉱工業施設等。

里山荒廃の原因は、

①農業の低迷

②農業者の減少と耕作放棄地の増加

③産業廃棄物の不法投棄等により里山が荒廃。

八千代市でも田・畑・山林の面積は14年間で28%も減少。要因は宅地開発で、人口は1.32倍に。県は里山条例を制定し里山の機能を積極的評価。

里山活動協定の締結及び認定は年々増加。千葉里山センターでは土地所有者や市民団体への登録、・情報提供・ネットワーク構築を推進。

地域住民の主体的な活動の展開、土地所有者の理解と協力、市町村の関与により、美しい里山（他に誇れる地域環境）の再生、活き活きとした地域社会の実現ができる。

講演２

「千葉市における谷津・里山保全の取り組み」　講師　斉藤久芳氏（千葉市環境局環境保全部環境保全推進課）

千葉市では、市街化区域及びその縁辺部の樹林を「街山」、市街化調整区域の樹林地を「里山」、市街化調整区域の田及び周辺樹林地等を「谷津田」と呼び、担当部署を決め保全の取り組んでいる。

①「大草谷津田いきものの里」事業については、若葉区大草町・北谷津町の大草谷津及び周辺樹林26haの整備である。短期的目標として「ホタルやメダカと共に暮らす里づくり」、長期的目標として「コウノトリと共生する里づくり」を掲げている。運営は、地元管理組合の活動と育む会の5部会（田・森づくり、生物環境、学

校活動、広報、谷津学校）で実施している。地主からの借り上げ期間は5年（更新可）で、奨励金は年額10円／㎡。

②「谷津田等の保全区域」は16か所を対象。所有者と協定締結→地権者と市民団体の活動協定締結→締結団体による保全活動　借り上げ期間は5年(更新可)奨励金は年額10円／㎡。

報告１

「西八千代北部特定土地区画整理事業の現状について」　報告者　八千代市都市整備課長

市民団体の活動を紹介

①神谷津の四季を楽しむ会

②ＮＰＯ子どもの文化ネットワーク・ソレイユ

③ほたるの里づくり実行委員会

④街づくり実行委員会

⑤千年の森「森の学校」

⑥ＮＰＯ八千代オイコス

⑦八千代自然と環境を考える会

報告２

東葉高速鉄道八千代緑が丘駅の北西部に広がる面積140haの事業。平成14年に認可を受けたが、関係機関や地権者との協議の中で土地利用計画の変更が必要となり、現在見直し作業を行っている。

まとめ

環境問題を取り組む市民団体と行政が参加し、意義や先進自治体の例の学習や市民団体の活動の情報交換をおこなうことができた。今後、環境問題を取り組む団体は数が多くなっており、より多くの団体が参加できる場にしていく必要がある。農業関係者の参加はなかったのでより働きかけをする必要がある。行政の中での「里山保全」に関係する部署の協議を進めていく必要がある。

第2分科会「里山と野生動物」

「里海とクジラ」～ホエールウォッチングにいこう！～

日　時：2007年4月7日（土）13:00～17:00

場　所：千葉県立中央博物館　講堂
参加者：約40名

趣　旨：

人・森・川・田んぼ・そこに住む動物たち等……その一連のつながりのなかで「里山」は存在しています。人が生きるために利用し、支えてきた里山。その里山に様々な問題が生じているのが現在の状況です。野生動物の問題にしても、動物たちと人との間によこたわる様々な深刻な問題（生息地の開発、農作物被害等）が存在します。千葉県内に於いても、サル、イノシシ、外来種による問題は深刻化しつつある。

ところで、千葉県は里山だけでなく美しい里海に囲まれている。里海とは、里山の概念を海に当てはめた言葉で、人が生きるために利用し継続的に手を入れてきた海のことです。

その里海を、同じ哺乳類であるクジラ・イルカも利用して暮らしています。そのクジラ・イルカを観察する「ホエールウォッチング」が現在世界各地で行われているが、新たな里海の利用形態になりうるのではないか。今回は野生動物の問題から少し離れ、動物たちが本来持つ素晴らしさを生かしたウォッチングという利用形態の可能性とその問題点を考えて行きたいと思う。

講演会：

講演1「銚子沖の鯨類について」

（宮内幸雄：銚子海洋研究所　所長、フリッパー号船長）

銚子沖は日本屈指のホエールウォッチングの適地である。夏はスナメリ、冬はマッコウクジラをはじめ、周年クジラ・イルカを観察することができる。本講演では、貴重な画像や映像を通じて、銚子沖で見られる鯨類の解説をしていただいた。

講演2「世界のホエール・ウォッチング、歴史と現状」

（舟橋直子：ＩＦＡＷ〔国際動物福祉基金〕ジャパン事務局長）

舟橋直子氏には世界中のホエールウォッチングを見てきた立場から、ホエールウォッチングの歴史や世界で行われている状況、また動物福祉からの観点について話していただいた。

講演3「漁師にとって、ウォッチングこそが現代、未来のイルカ・クジラ漁である」

（石井泉：城ヶ崎イルカ・クジラ・ネイチャーウォッチングセンター代表、光海丸船長）

富戸は代々クジラ漁が行われてきた土地である。そんな中で、クジラ漁に疑問を抱き、一人ホエールウォッチングを始めた石井泉氏の奮闘ぶりを話していただいた。ホエールウォッチングは現在のクジラ・イルカ漁だ！

パネルディスカッション「これからの日本のホエールウォッチングを考える」

司会：菅原茂（ＮＰＯ法人国際海洋自然観察員協会　会長）
パネリスト：宮内幸雄、舟橋直子、石井泉、中村松洋（夢鯨の会　会長・松鶴丸船長）

講演者３名に、いすみでスナメリのホエールウォッチングを行っている中村松洋氏を加えて、ホエールウォッチングの問題点やこれからの可能性について活発な議論が行われた。以下に、論点とそれに対する発言をまとめます。

☆イルカ・クジラが見えないときはどうするか？

日本でのホエールウォッチングは「クジラを見せる」という点にフォーカスが行き過ぎていて、全てを楽しむという視点には至っていない。クジラ以外の自然や景色を見て、海に来たなら何でも楽しんでもらいたい。そのためには、海鳥など専門性のあるガイドによる解説が必要。一人でも多くの人に感動を伝えられるようなプロを育てたい。また、お土産やその他の魅力等、ホエールウォッチング以外でも楽しめる地域作りが必要。

☆ホエールウォッチングをするには漁港が必要。協力を得るために、どう漁師に理解してもらうか？

ホエールウォッチングが商売になるのかと疑問視された。また魚を食べるとしてクジラ・イルカを敵視している漁師もおり、当初は理解が得られなかった。しかし、頑張っている姿を見せることで協力してもらえるようになった。ホエールウォッチングには泊りがけで来る人がほとんどなので、その経済効果は大きい。小さいお金でも、地域の目・意識を変えるには十分だった。また、地域の子供の環境教育にも利用されている。漁師にはこれらの点を踏まえて理解してほしい。また、漁師にとっても、ホエールウォッチングは投資が少なく始められる事業である。

☆これからのホエールウォッチングに期待するものとは？

ホエールウォッチングをしていると海の視点から山を見ることができる！これからは、海だけでなく周り環境を一続きの自然として感じてもらえるような自然学校をやってみたい。また、漁協を挙げてホエールウォッチングをバックアップすることで、地域が活性化し漁業の復興につながるのではないか。

日本では調査・研究の協力の視点が少ないのではないか。協力によって、新しい知識を得るだけでなく危険を未然に減らすことができる等のメリットがある。また、ホエールウォッチングが盛んになることで、イルカ・クジラの行動に配慮しない業者が現れることがある。そのため、観察のためのルールを作る必要があるかもしれない。

クジラ漁については一度整理をする必要がある。千葉ではツチクジラ漁をしている地域が今もあるが、この先クジラの漁を認めるのか、地域文化として認めるのか、それらを考えていく時期になっている。しかし、クジラ漁を行っている漁師には後継者不足と年の問題が付きまとっているので、自然消滅的になくなるかもしれない。ホエールウォッチングが新たなイルカ・クジラ漁だ。

まとめ：

里海という環境を利用したホエールウォッチングは、地域の活性化に寄与する。ぜひ里海に足を運んでもらいたい、またホエールウォッチングを通してその素晴らしさの一端を体感してほしい！

第３分科会「里山と医療・福祉」

ワークショップ　「森林療法の体験」

日　時：
第１回：４月25日（水）12:30～15:30
第２回：８月25日（土）10:00～13:00
第３回：９月23日（日）11:00～14:00
第４回12月15日（土）10:30～14:30
第５回平成20年２月23日（土）時間未定

場　所：第１回：千葉市泉自然公園
第２回：清和県民の森
第３回：木更津市一千木
第４回：神崎町大峰教育の森～よさぶの森
第５回：佐倉市草ぶえの丘内市民の森

参加者：第１回：12名　第２回：19名　第３回：11名

趣　旨

ドイツで始まった森林療法にフィールドワークの要素を取り入れて実践します。森の中を時間をかけて歩くことにより、ストレス緩和、癒し、健康増進などの効果が得られます。

内　容

講師：赤城建夫　氏　　臨床心理士　ちば発達評価・心理指導ルーム所属
第１回：春の香りを楽しむ
第２回：夏の風を楽しむ
第３回：稲刈り後の香りを楽しむ
第４回：小春日和見～焼芋とお茶を楽しむ～
第５回：枯葉の上を歩く

結　果

第１回：春雨にけぶる泉自然公園を散策した。テーマの「春の香り」とは、雨に濡れた草木の香りであることを皆で体感した。
（参加者の主な感想）
・好きな木と話すプログラムを行ったことで、おだやかな気持ちになれた。
・緑の回廊、新緑の世界、空気、香りの中、新緑の宙を歩み、樹上の生物になった感じ。
・雨上がりの森の苔の絨毯の感触、つつじの枝先についた花、これまでに無い感触を体験した。

第２回：晩夏の清和県民の森、暑い中にも涼風が心地よいワークショップだった。大きな声での挨拶から始まり、「風の卵になる」「風を探しに行く」など、参加者が夏の風と一体になれたプログラムだった。
（参加者の主な感想）
・風と話が出来たような気がした。風にも命があるように感じられた。
・森と風と人間が一体になる。何だか自然のエネルギーの中に溶け込んでいくような感じ。

第３回：稲刈りの済んだ田を抜けると、一面の湿地に出た。しばらく進むと休むことなく湧き出る泉に到着した。香り（稲、セリ、湧水）、暑さと冷たさ（身体の暑さ、湧水の冷たさ）、狭さと開放（崖道と湿原空間）など、バラエティーに富んだ体験が出来た。

（参加者の主な感想）

・湿原でセリと水の香りに包まれて、心地よい空間だった。

・泉の水に足を浸してみた。水がこんなに冷たいものとは初めて知った。

結　論

・５回のワークショップを通して、それぞれの季節の森林の表情を観察し、歩く・触れる・声に出す、などの身体表現を採り入れることにより、自然のエネルギーを体感し、癒しを得ることが出来る。森の中には、風・香り・水・樹木・草・土など五感に働きかける色々なアイテムがあり、これらに能動的に関わることにより、自らの心や体も自然と一体化してゆく。それが森林療法の効果を得られる第一歩である。

まとめ

医療・福祉というテーマには様々な角度からのアプローチがあり、森林は、人と自然をつなぐ境界のような存在である。

森林はそれ自体、自然に存在しているのではなく、人間が環境整備をするなど継続的に手入れをすることにより存続を可能としている。

人間は森林から癒しをもらい、森林もまた人間から施しを受ける。そのような相互の循環を理解し、森林や人間の鼓動、そしてそれを取り巻く自然のリズムやエネルギーを体感することが出来れば、医療・福祉に対する新しいアプローチを開拓出来たということである。

第４分科会「里山と森林・農林業」

地域と共に生きる「なりわい」は成り立つか？

日　時：2007年4月28日(土)13：30～16：30

場　所：東金市 東金文化会館

参加者：45名

趣　旨

先人の知恵を受け継ぎながら繰り返されてきたかつての暮らしは、自然に負荷をかけず持続可能な社会を形成していました。

このような環境と共生する仕事、暮らしが「なりわい」として成り立ちにくくなっています。

住宅建築でも農業でも「なりわい」的な小規模、少量生産はたちまち大資本に飲み込まれてしまい、守り手を失った森林や農地の荒廃がすすみます。

地域で仕事をし、暮らすことが環境を守る、そして経済的にも豊かになれるような地域循環型の「なりわい」は成立しないのでしょうか？

成立させるためにはどのような仕組みを作らなければならないのでしょうか？市民と行政、林業家、農業者が協力して、より良い地域づくりの道を考える討論会を行います。

内　容

参加者　**・グループ「木と土の家」のメンバー**
- 林業家
- 市民
- さんむフォレストのメンバー

発表者　今関 貞夫　氏（東金市役所）
・情報を出し、情報を交換する必要。地域の環境が農業の営みの中で守られていることを知ってほしい。

発表者　鈴木 天　氏（農業）
・農業に魅力があった時代を取り戻したい。地域の農業者の人組みによって農村を再生し、特産品を作り出そうとしている。

発表者　本間 一夫　氏（さんむフォレスト）
・地域循環の考え方と住環境関連がもっと認識されても良い。地元の持っている力で風土の再生。

発表者　石井 充　氏（材木商、グループ「木と土の家」代表）
・地域循環型の住まいづくりを「なりわい」にする。仕事を通じて地域の再生に貢献する仕事集団としてのグループ「木と土の家」の試み。

結　果

・地域で活動する人それぞれの役割を見つけ、人の心をどう組んでゆくかということ。

・「なりわい」と呼べる農業のあり方が、地域環境を保全してきた歴史と現状について、現在どのような施策がとられているのか？

・千葉県特産の山武杉で住まいづくりをする地域循環の仕組みが、この地域の自然の再生と地元林業の活性化に役立つということを市民に理解してもらう。

結論

今日では神社の周囲が広く照葉樹林に覆われているが、それは管理が停止されて以降、顕著になったものと新たな研究が小椋純一らによってなされている。

むら人達は鎮守の社に豊作と無事を祈ってきたが、神社に対する気持ちは、特定の神に対する深い宗教心というよりは、むら共同体社会への連帯の精神であったと考える。

また、むらの社会には、世代や性別毎に共通の願いをこめて行われるいくつかの講があった。
子どもたちの天神講、年寄りたちの念仏講など消滅したこれらの講のなかには、効率を優先しすぎた今日の社会において、人と人とのつながりや精神的な面では代償が必要となるものもあるのではなかろうか。

まとめ

・市民の消費行動がこれらの地域循環を支え、「なりわい」を成立させるということを理解してもらう。

第５分科会「里山と観光」

″なりわい″の拠点施設「南房総ワクワク村」プロジェクト

日　時：2007年4月29日(日)　10：00～16：30

場　所：南房総市　茅葺きの古民家「ろくすけ」

参加者：10名

趣　旨

里山をキーワードに、どうやったら「なりわい」として成立するのか。
茅葺きの古民家（築１７０年）を拠点とした「南房総ワクワク村」を実際にプロジェクトとして進めること（行動していくこと）がきっかけとならないか考える

内　容

この分科会は、ワークショップとしたので、発表などの機会はなく、参加者が主体となって進めたため、特に無し。

結　果

（目的）・思うこと、考えること、話しをすることは誰でもできる。誰が何をどうするかなど…その６Ｗ２Ｈ、つまりその方法論は無限にある。しかし、行動することこそが今一番必要なことであり、もとめられていることである。

（現状）・地の人（地域の方々）にとってはなりわいの成立、風の人（訪れる方々）にとっては場作り。しかし、双方が一緒に無理なく続けて行ける行動となることが大切。

（課題）・まずは拠点となる茅葺きの古民家「ろくすけ」とその周辺を整備し、地域を知る事から始める。そして先人の知恵、知識、技術を学ぶ。

作業計画
９月２３日　草刈と畑つくり、蔵の整理
１０月１４日　道の草刈り、いちご苗定植
以下予定
１１月１８日　ブルーベリー定植、枯葉で焼き芋
１２月１６日　周辺整備で出た竹でオブジェ（クリスマスと正月用）、忘年会

まとめ

しのごの言わずにまず動き出そう。
Just do it !!
うまくいかなかったらその時また考えよう。

第６分科会　里山と教育・学習

「農業を体験し、食を考え、子らの心を育てる」

日　時：５月６日（日曜日）13：00～16：30

場　所：千葉県立中央博物館「講堂」

参加者：１３５名

趣　旨

日本は農業国であることを認識をさせ、子ども達が農業体験を継続することで体験が経験に変化する。

食への感謝が自らの経験によって一層深まり、「自然体験はオマケではない」を実感させることを目的としている

内　容

《総合司会　鈴木 敦（NPO 緑のネット千葉）》

１．基調講演「環境教育における体験の意義と里山」
　京都教育大学教授　山下宏文　氏

２．千葉市立みつわ台北小学校６年生児童による実践報告

３．「わらべうた」千葉福祉会「たいよう保育園」園児と保育士

４．意見交換会：
　山下宏文（森林文化教育研究会代表幹事）
　中村俊彦（千葉県立中央博物館副館長）
　鈴木　真（東京都練馬区立中村西小学校教諭）
　住本壽司（千葉市立みつわ台北小学校校長）
　吉井　勇（千葉市立みつわ台北小学校教諭）
　高橋将之（農業経営）
　コーディネイーター
　　司会 上善峰男（森林文化教育研究会事務局長）

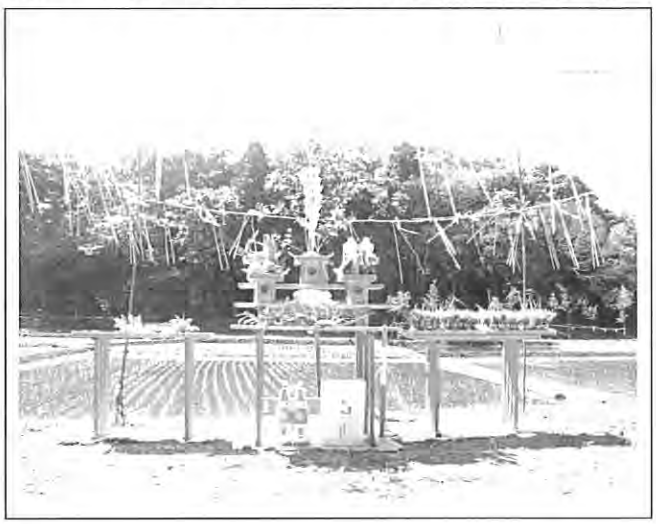
学校農園では児童が秋から集めた、校庭樹木の落葉で腐葉土ををつくり、耕した土に混ぜ下ごしらえをした。

京都教育大学山下教授が、環境教育を進める中で大切なことは、里山と日本人とのかかわり、里山の現状認識、里山の美しさを学ぶことで子ども達の心が育つ事例を話した。

※　効果としては、農業体験した後で給食の残飯が激減した。

意見交換会

千葉市立みつわ台北小学校６年生児童の農業体験実践報告をベースに、パネリストがそれぞれの立場から意見を述べた。



みつわ台北小学校校長の住本氏は、「教室内の学問だけでなく農業体験を通じて子ども達が、物をつくる喜び、苦労、そして感謝の気持ちが芽生え、心身ともに逞しく成長することを願っている」。

千葉県立中央博物館副館長の中村氏は、「都市も農村も小学校で農業の時間を設けられないかと提案」。

米作を中心に千葉市内で農業経営をしている高橋氏は、「現在の里山で最大の危機は、農家に後継者が育っていないことだ。後継者不足と高齢化悩む農家の人間として、一人でも多くの小学生が、農業に関心を持ち理解をしてくれることは大きな励みとなる。教育の中心でぜひ農業を教えていただきたい」とそれぞれが思いを述べた。

実践報告

千葉市立みつわ台北小学校６年生の児童（６人）が、５年生の時から取り組んできた農業体験を中心に報告した。

1．秋から冬にかけて、日課となった校庭清掃時に落葉を集め堆肥にした。
2．社会科で勉強した農業を、机上の学習だけでなく実際に体験してからは、給食を残す子どもが少なくなった。農家の人の苦労と給食調理の人達の苦労が見えてきたようで、有り難さを感じたからだろう。
3．自分達の学校に大型トラクターがやってきた。その威力に感動し、農業に関心を持つ児童が増えた。６月にサツマイモを植え付け、秋になると全校で収穫するのが楽しみだ。
4．地域に今も残る、水神様、田ノ神様への信仰と伊勢神宮へ奉納する「奉納田」の神事と御田植えの様子を見学した。また地域に残る古代から現代へのメッセージ、庚申塚、馬頭観音など石碑を千葉経済大学附属高校の亀井先生の指導で観察した。

結論

子ども達に自然を理解させることは、物知りを育てたり科学者を育てるためではない。また自然を体験すれば何かを学べるというものでもない。自然体験はやり方よって子ども達が学ぶ角度と理解の深さが変わってくる。

まとめ

自らの体験で見えなかった物が見えるようになる力が養われる。
学校教育は「人間力」を備えたよりよい社会人つくることが目的だ。
日本人は農耕民族として、農に感謝しながら年間の伝統行事がある。
農業を通じて身、美、善を極めた教育が望まれる。

第７分科会「里山と生物多様性」

「里山の生物の多様性がささえるなりわい」

日　時：2007年7月1日(土)10時00分～17時00分

場　所：千葉県立中央博物館

参加者：58名

趣　旨

里山の生物の多様性を保全、再生しながら、共存していける里山の「なりわい」とは。それらを持続していくには、どのような意識の改革や、取組みが必要か話し合い、「千葉県生物多様性戦略策定」案に 提案する。

内　容

対談.

「生物の多様性が支える里山のなりわい」

尾形玲子（一二三養蜂園）倉西良一（千葉県中央博物館）

コーディネーター鈴木優子（下泉・森のサミット）

蜜源の違う蜂蜜を試食.　果実酒展示

講演.

「里山の生物の多様性」中村俊彦（千葉県中央博物館）

ワークショップ.

「生物の多様性が支える里山のなりわい」

参加者報告と講評（中村、倉西）・

目的

里山の生物の多様性を保全、復元するためには農的環境の持続と地域社会が存続できる「なりわい」が必要である。養蜂業など千葉の自然風土に合ったなりわいを提案したい。

現状

生物の多様性がどんどん失われている。

かっての里山の多様な「なりわい」は担い手が食べていけなくなって激減。

結論

ＮＰＯ活動を活発化させて一人ひとりが意識を変革し、自然を大切にするアクションを起こす。

多様な資源を活かした地場産業を大切にし、地産地消や援農ボランティアやレンタル農園に取り組む。地権者は他所者でも受け入れる寛容さ、そのためのルールづくり、環境保全、作物に付加価値をつける努力をする。

行政は法律手続きの簡素化、里山の開発制限、ボランティアや起業支援、生物多様性カリキュラムを環境教育として実施する。企業は開発の対価を負う。

まとめ

参加型の分科会で沢山の提案が出ました。

農業や養蜂業はじめ里山の多様な生物と、利活用する「なりわい」を支援しよう。

第８分科会「里山と生業・起業」
生業につなげる起業講座

日　時：2007年7月16日（日）　10:00～16:00

場　所：山武市松尾ふれあいセンター農事研修室

参加者：22名

趣　旨

活動は『里山』に限らず、福祉、子育て・・の分野でも、

内容

講師：奥谷京子（WWBjapan代表）

生業に繋げるための起業の仕方、実例から基本的な考え方、損益分岐計算、資金調達、運営形態、宣伝広告まで盛り沢山の内容を受講しました。

目的

福祉分野は比較的、市民活動にも助成金や行政からの補助金があります(?)が、里山活動や子育てには、活動を開始しても資金不足で挫折する場面をよく見掛けます。里山活動でも自立した会計が保たれるように、活動資金を生むシステムが必要です。先ず、自立を目指しその先に生業までつなげられるような起業を目指す第一歩を、当講座は目指します。

まとめ

参加者は、既に起業している方、目指す方、子育て支援グループ、農業を目指す方、音楽で起業する方、多種多彩な方が参加下さり、さながら異業種交流会の雰囲気です。終了して3ヶ月になりますが、参加者同志の交流が生れているようです。皆さん、補助金頼りの活動でなく自立の心を持った方達ばかりで、各々の活動の弾みになったようです。

第10分科会「里山と残土・産廃」

残土・産廃は里山をつぶす

日　時：　2007年5月18日　13時00分～18時00分

場　所：木更津共栄残土置き場及び木更津市民ネット

参加者：20名

趣　旨

里山の生物の多様性を保全、再生しながら、共存していける里山の「なりわい」とは。それらを持続していくには、どのような意識の改革や、取組みが必要か話し合い、「千葉県生物多様性戦略策定」案に 提案する。

内容

発表者　「事業主協栄産業についての説明」
木更津市民ネット　　金井珠江

現状

しかし何故自然を売り物にするのだろうと思う。
しかも穴を掘り深く埋めてそのうえに山に盛る。
かっての緑の里山は茶色のまる裸の哀れな状態になり住民の飲料水を悪化する。ガスが噴出することもある。

課題

里山を食い物にしないで、里山を生かすことを考えなければ、千葉の風景はどんどん変わっていってしまう。この事業は千葉県ではなく警視庁管内の事業だったので警視庁管轄の取調べになり、事業差し止めになったが、山砂問題も浮上しているときだから千葉県警もしっかりやってほしいと思っている。

まとめ

里山を活性化して残土・産廃をおかせない。里山は子供の楽園になる。みんなで里山になりわいの花を咲かせましょう。

第 11 分科会「里山と水循環」

水循環と生物多様性～湧水と生物の場を見て考えてみましょう～

日　時： 2007 年 5 月 18 日　13:00～18:00

場　所： 千葉市緑区越智公民館

参加者： 30 人

趣　旨

台地へ降った雨は地下へしみ込み、その一部は谷津頭等から湧水として出てきます。今回は、湧水、生物など周りの環境を見て体験します。専門家からは、湧水の仕組みとその保全について、NPO 団体からは、湧水を利用しての谷津田での活動についてお話をお聞きし、意見交換を行います。

内容

・「水循環の観点から見た大藪池湧水の仕組みとその保全」
　唐　常源　氏　　千葉大学園芸学部緑地･環境学科　教授

・「活動紹介」
　高山　斎一郎氏　　プロジェクトとけ

目的

湧水の仕組みと谷津田での生き物について観察する。体験して学ぶことを通して湧水保全について考える。

現状：

1）湧水
・硝酸態窒素が多い。
・湿地による硝酸態窒素の浄化効果。
・湧水地点の移動(開発が一因か？）。

2）谷津田
・不耕作田が増えていく　（米作りがなりわいとならない）。
・湧水を利用しての稲作者の高齢化(休耕田）。
・耕作することで生きものが豊かになる。

3）現地見学して
・大藪池の湧水量の豊かさと　谷津田の生きものの豊かさを実感した。
・湿地の大切さを学んだ。
・台地上でのエコ農業の推進。
・景観からも人の気持ちの安らぐ場所である。

課題：

・硝酸態窒素を浄化するための湿地が少ない。

・水循環についてのモニタリングが必要。

・産廃場の対象になる危機感がある。

・湧水保全の仕組みづくりが必要。

・湧水・生物の必要性について環境学習の機会を増やす。

まとめ

美味しく安全で良好な水を利用するためには、良好な水循環を保持し「水循環系」に配慮することが必要である。

そのためには、湧水保全、生物保全について、現地を体験し共通理解し、さらに市民、地権者、企業、行政の協働による保全への仕組みづくりが必要である。

第 12 分科会「里山と政策」

「なりわい」を支える直接支払い

日　時：2007 年 7 月 8 日（日）13:00～15:30

場　所：千葉市生涯学習センター　小研修室1

参加者：26 名

趣　旨

生産物に対して価格助成する制度が主体であったこれまでの農政から移行して、１９年度からは「農地・水・環境保全向上対策」事業が始まります。

これは、環境を守る農作業について、農家以外の人も交えた担い手団体に直接支払いを行う制度です。

今後の日本の環境・食糧・農業のとるべき方向、国際情勢との関連等の視点からお話しを伺い、意見交換した。

内　容

「田園立国」の勧め　　細谷章氏（日本農業新聞編集局農政経済部長）

結　論

目的：今後の日本の環境・食糧・農業のとるべき方向、国際情勢との関連等を考える

現状：

１）衰退進む日本農業（３つの K）・・・担い手の育成・確保が緊急の課題

・後継者不足

・高齢化・・・昭和一ケタの人が食を支えている

・耕作放棄地の増大・・・作付面積　140 万 ha　　休耕田 100 万 ha

２）グローバル化の荒波（平成の黒船）

世界の農産物貿易ルール：149 の加盟国・地域が共通のルールを決めるための WTO 交渉が行われており、さらに国・地域間で関税撤廃等を行う交渉等がすすめられている。

・WTO・・・どの国に対しても同様の条件で、関税などの通商規則を定めることが原則、関税、国内支持、輸出補助金の削減ルール等を交渉。EPA・FTA の多角的貿易体制を補完

・FTA（自由貿易協定）・・・協定構成国のみを対象に、貿易自由化を行う協定、原則として 10 年以内の関税撤廃を交渉

・EPA（経済連携協定）・・・協定構成国での貿易自由化だけでなく、投資の自由化、経済取引の円滑化、協力の促進等幅広い分野を含む協定

・自動車の犠牲

３）始まった農政改革（グローバル化対応）

・品目横断的経営安定対策

① 諸外国との生産条件格差から生じる不利を補正（麦、大豆、てん菜、ばれいしょ）

・・・担い手の生産コストのうち、販売収入では賄えない部分を補てんする。

② 収入の減少の影響を緩和するための補てん（米、麦、大豆、てん菜、ばれいしょ）
・・・その年の収入が過去の平均収入を下回った場合に、減収額の9割を補てんする。
・米政策改革（初めての、生産者による生産調整）
・農地・水環境保全向上対策：生産と切り離した環境保全（デ・カップリング）
営農活動への支援（営農基礎活動支援、先進的営農支援）
共同活動への支援（基礎支援、ステップアップ支援）

環境直接支払い（AFC Forum 4 2006より一部改変）

農業による環境負荷の軽減や、農地や水などの資源の維持や、生態系保全などの環境を守るための負荷を支援する制度。WTOでは、生産を直接刺激しない政策として位置づけられており、農業施策の一環として欧米では既に幅広く取り入れられている。

日本では「農地・水・環境保全向上対策」として、農地や農業用水などの農業資源のほか環境の保全と質の向上への取組に対して助成金が支払われる仕組みです。欧米でいう環境直接支払いに相当するもの。

平成19年度から本格的に実施。農業者以外も含めた地域ぐるみの活動組織の共同活動と、環境保全のための営農活動を行う活動組織に対して助成金が支払われる。活動組織は、活動計画を作成し市町村と協定を結ぶ。営農活動への支援では、化学肥料・化学合成農薬の使用を原則5割以上低減することなどが求められる。

結論：「田園立国」の時

・農のある地域づくり
・農村の活性化
・都市と農村の調和

課題： 迫る食料不足の時代（「3つの口」）

・世界の穀物の需要量は、人口の増加、所得水準の向上に伴い増加している一方、生産量は作柄により変動しているものの、主に単収の伸びにより需要量の増加に対応している。
・期末在庫率は、食料危機と言われた1970年代初めの水準まで低下している。
・エタノール需要の高まり
・人口増加・・・食料供給不足で緊急援助を必要とする国(世界の30カ国)

2002年の食料自給率(%)：

豪州230、フランス130、アメリカ119、ドイツ91、イギリス74、スイス54、韓国47

平成10年度の食べ残し 700万トン(11兆円)＝1日 2万トン→アジア諸国の1600万人分

・ 家畜飼料の増大
・温暖化と穀物生産
・期末在庫率は、食料危機と言われた1970年代初めの水準まで低下している。

まとめ

農林業に対する産業政策の再検討が始まっている。いくつものキーワードがある中で、環境支払いは農地を保全し、農村に人を住まわせ、食糧を生産しながら結果的に国土の保全の機能も果たすものである。諸外国の例からみても、今後の対策の柱の一つであると考える。今後、これらの財源をどこに求めるか、誰がどのように負担するかがもっと国民の間で議論されるような状況作りに、私たちの小さな活動がその一助となりたいものと考える。地球温暖化と相似して、グローバリズムの中で、総論を各論の意識にまで具体化しなければなかなか効果が見えてこない分野である。継続した各般での努力が必要であると考える

第13分科会「里山と竹」

里山の活用と竹林セラピー

日　時：第1回は平成19年7月28日（土曜日）午前10時から午後3時まで

場　所：①四街道市中台字長堀652番1の白い竹園
②山武郡芝山町大里1400番地のオオゴンモウソウの竹庭

参加者：94名

趣　旨

竹林セラピーとは、竹林を健康増進や健康回復に役立てるものです。いま多くのストレスがありそ解消が必要です。その解消に竹林がもつ本来の機能を役立てたいのです。

内容

竹林セラピーとは、竹林を健康増進や健康回復に役立てるものです。いま多くのストレスがあり、その解消が必要であり、竹林がもつ本来の機能を役立てたいのです。

1　かって，竹は日本人の「なりわい」に深く係わってきました。竹は人々の生業そのものでした。
しかし，竹をとりまく環境は劇的に変化し・今や竹は厄介もの扱いになっています。

2　人々の生業が変わば、それにあった竹の活用があるはずです。竹は，人々のニーズに応えることができるはずです。

3　幸い，日本人には、育成された美しい竹林や、珍しい竹がたくさんあります。しかし、これらの竹林は十分活用されてはいません。　そこで，竹研究会は管理された美しい竹林を多くの人に開放するとともに，里山の放竹林を整備して珍しい竹や名竹を里山に移植することなどを実践してきました。

4　竹の美しさを再認識していただくために、今回は白い竹園（アルビノの竹園）とオウゴンモウソウの竹林（竹庭）見学を実施しました。また、竹林セラピーの有効性について，現地で説明をおこなうことにしました。

（現状）

森林セラピーは、最近新聞やテレビで取り上げられるようになりましたが、竹林セラピーは、まだ一般的には認知されたとは言えません。

（目的）

竹林の美しさや清々視差は、日本人であれば一度や二度は経験したことがあります。

そして竹林を健康回復や健康増進等に活用していただきたいと思うからです。美しい竹林が健康面で、良いことは、誰もが疑う余地はないのです。

しかし、竹林はあまりにも人々の身近にあったことから、取り立てて「セラピー」等と言いたてる必要がなかったのです。竹林研究会は、時代にあった新しい生業として、竹林セラピーを考え実践してきました。今回の目的とするところは、多くの方に竹の美しさと良さを再認識していただきたいと考えたからです。

そして竹林を健康回復や健康増進等に活用していただきたいと思うからです。

まとめ

NPO 法人竹研究会は、いまの時代にあった竹林の活用を考えてきましたが、そのひとつが、里山の活用と竹林セラピーです。

メモ欄

メモ欄

メモ欄

第４回　里山フェスティバル「里山シンポジウム」報告書
里山に託す私たちの未来２００６「里山となりわい」
２００７年１１月３０日　正式版（Ver4-6）

発　　行：里山シンポジウム実行委員会・東金市
　　ちば里山センター・(社)千葉県緑化推進委員会・千葉県
編　　集：里山シンポジウム実行委員会
編集担当：荒尾 稔・川上寿子
事 務 局：株式会社 トータルメディア研究所 内
　　113-0021　東京都文京区本駒込 4-38-1
　　Tel. 03-3824-6071　Fax. 03-3824-5980
　　E-mail:minoruarao@tml.co.jp　ＨＰ:http://www.tml.co.jp

里山シンポジウム実行委員会　公式 HP： http://www.satochiba.jp

付記）この報告書は印刷に於けるゴミゼロを目指し、Word→デジタルカラーコピー機による作成をしました。

会館全体会 会場写真

里山に託す私たちの未来「里山となりわい」

第４回　里山フェスティバル「里山シンポジウム」
里山に託す私たちの未来「里山となりわい」
主催：里山シンポジウム実行委員会・ちば里山センター・城西国際大学・（社）千葉県緑化推進委員会・東金市・千葉県

2008/2/18 現在　V4-7　×100